

プラトン「国家」
(紀元前427年 - 紀元前347年)

理想的国家(ポリス)

四大徳

・正義

(・知恵)

・節制

・勇気

徳

徳

徳

徳

哲人王

・政策手段は自由
・善のアイデアの道德観

軍人

・命令に従って戦い
国家の安全を保つ

労働者

(農民・職人・商人ら)

王に助言
(政策・実践方法等)

哲学者

完全・普遍・永遠の
真実体 = 理性的認識

理想

〔師〕
ソクラテス
(僭主制)
(武力で君主の座を確保)

背景

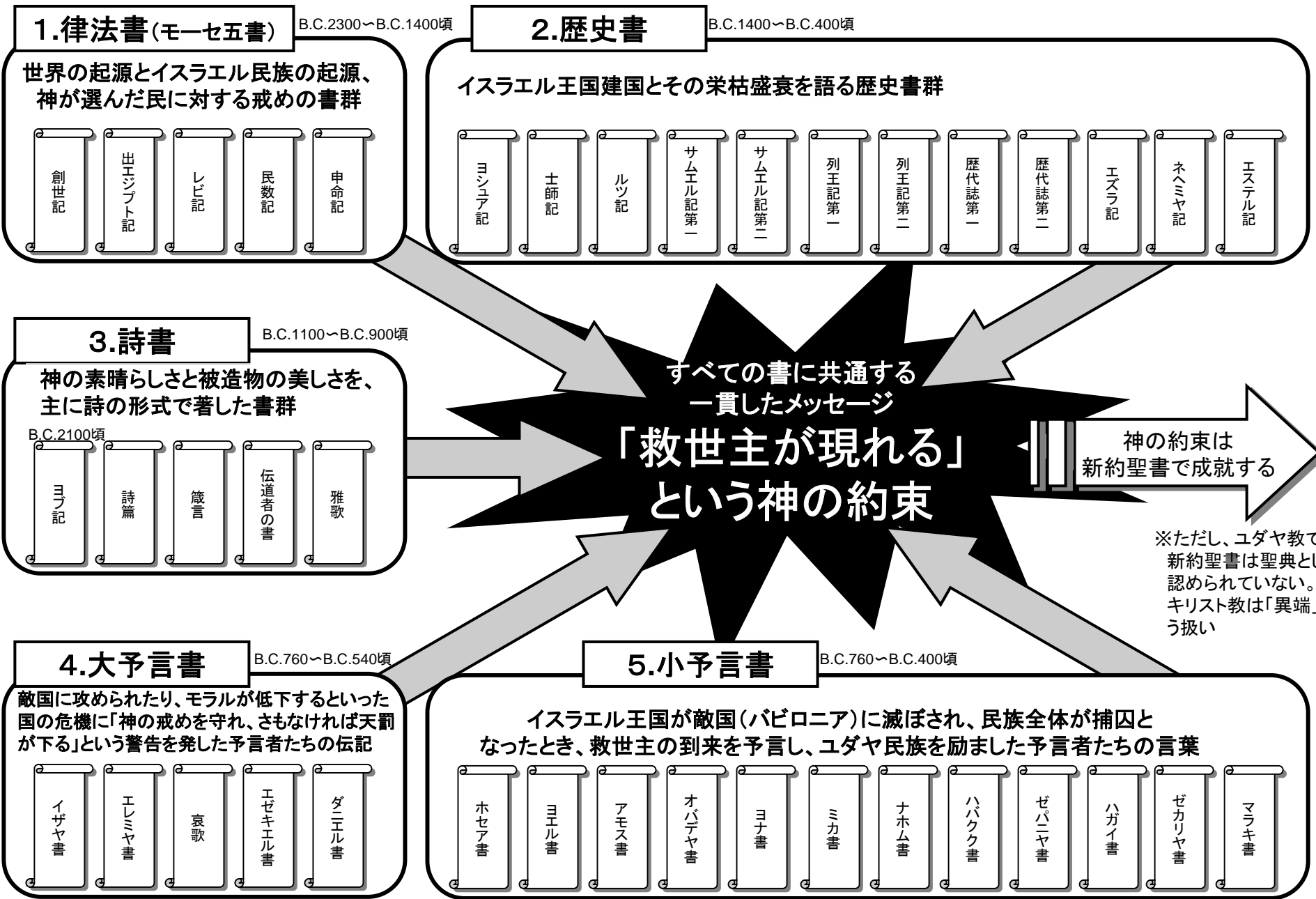
民主制

衆愚政治であり罪であるとみなした

プラトン

ソクラテスの死刑が影響

旧約聖書 <全39巻、5つのパートからなる、救世主が現れるという約束の書>



1. 律法書(モーセ五書) B.C.2300~B.C.1400頃

世界の起源とイスラエル民族の起源、神が選んだ民に対する戒めの書群

- 創世記
- 出エジプト記
- レビ記
- 民数記
- 申命記

2. 歴史書 B.C.1400~B.C.400頃

イスラエル王国建国とその栄枯盛衰を語る歴史書群

- ヨシヤア記
- 士師記
- ルツ記
- サムエル記第一
- サムエル記第二
- 列王記第一
- 列王記第二
- 歴代誌第一
- 歴代誌第二
- エズラ記
- ネヘミヤ記
- エステル記

3. 詩書 B.C.1100~B.C.900頃

神の素晴らしさと被造物の美しさを、主に詩の形式で著した書群

- B.C.2100頃
- ヨブ記
 - 詩篇
 - 箴言
 - 伝道者の書
 - 雅歌

4. 大予言書 B.C.760~B.C.540頃

敵国に攻められたり、モラルが低下するといった国の危機に「神の戒めを守れ、さもなければ天罰が下る」という警告を発した予言者たちの伝記

- イザヤ書
- エレミヤ書
- 哀歌
- エゼキエル書
- ダニエル書

5. 小予言書 B.C.760~B.C.400頃

イスラエル王国が敵国(バビロニア)に滅ぼされ、民族全体が捕囚となったとき、救世主の到来を予言し、ユダヤ民族を励ました予言者たちの言葉

- ホセア書
- ヨエル書
- アモス書
- オバデヤ書
- ヨナ書
- ミカ書
- ナホム書
- ハバクク書
- ゼバニヤ書
- ハガイ書
- ゼカリヤ書
- マラキ書

すべての書に共通する
一貫したメッセージ
「救世主が現れる」
という神の約束

神の約束は
新約聖書で成就する

※ただし、ユダヤ教では新約聖書は聖典として認められていない。キリスト教は「異端」という扱い

主に為政者たちへの警告

主に捕囚となったイスラエル民族への慰め、励まし

「英雄伝」プルターク
46頃～120頃

多くの人々が教訓としていった

伝記

歴史書
||
様々な出来事や
史実を中心に書く

特定の人物の言動を中心に書く
↓
紀元1～2世紀頃の古代人の考え方が書かれている
豊富な逸話

似通った生活を送った英雄の伝記

①ギリシャ人の伝記
例
デメトリウス
アレクサンドロス

③対比論
二人の対比論
対比論なし

②ローマ人の伝記
例
アントニウス
カエサル

①～③の3つで1組の組み合わせが原則

22組の組み合わせと4人の単独伝記で構成される

人物の性格が明確に記されている

詳細な内容や書物の引用によって、史料としても重要になった

新約聖書 <旧約聖書の予言の成就(救世主イエス・キリストの誕生)による、新たな約束の書>

A.D.0～A.D.30頃

A.D.30～A.D.60頃

A.D.50～A.D.70頃

A.D.50～A.D.70頃

A.D.90～A.D.100頃

1.福音書(良き知らせ)

2.歴史書

3.教会書簡

救世主の誕生とその生涯、
神の約束の成就を知らせる伝記書

イエスの復活、昇天後
使徒による世界宣教
(ローマ帝国へ布教)の経緯

使徒パウロが他国、他地域の教会に当てて書いた手紙

- マタイの福音書
- マルコの福音書
- ルカの福音書
- ヨハネの福音書

- 使徒の働き
- 使徒
 - ペテロ
 - パウロ
 - ヨハネ
 - アンデレ
 - トマス
 - ナタナエル
 - ...他

- ローマ人への手紙
- コリント人への手紙第一
- コリント人への手紙第二
- ガラテヤ人への手紙
- エペソ人への手紙
- ピリピ人への手紙
- コロサイ人への手紙
- テサロニケ人への手紙第一
- テサロニケ人への手紙第二

4.個人書簡

使徒パウロが他国、他地域の
信徒リーダーに書いた手紙

- テモテへの手紙第一
- テモテへの手紙第二
- テトスへの手紙
- ピレモンへの手紙

目的

「救世主(イエス・キリスト)が
現れる」という神の約束が、
どのように事実となったかを
全世界に知らせる

新約 = 新たな約束

全ての人は、イエス・キリストを「神の子」として信じ受け入れることで、旧約の律法の行いなしに、神に受け入れられ、天国に行くことができる、というもの

5.共同の手紙

パウロ以外の使徒が、他国、他地域の、主にイスラエル民族の
キリスト教徒に対して書いた手紙

- ヘブル人への手紙
- ヤコブの手紙
- ペテロの手紙第一
- ペテロの手紙第二
- ヨハネの手紙第一
- ヨハネの手紙第二
- ヨハネの手紙第三
- ユダの手紙

6.預言書

神の約束の成就としてのキリスト誕生後、
世界が今後どのようになるかという預言書

- ヨハネの黙示録

異民族による襲撃

伝統的ローマ社会の衰退化

討伐

東ローマ皇帝ユスティニアヌス

憂い

法による広大な領地の統制

「勅令集」

歴代皇帝の各法典や勅令のまとめ

「学説彙集」

法学者の2000冊の法学書から取捨

「法学提要」

法学生用の教科書

三部作

ユスティニアヌスの
勅令も追加

古代ローマ法文化の集大成
「ローマ法大全」の完成

西欧

12世紀以降見直され、
古典復興の気運が高まり、
各国の民法典に影響

長く影響

東欧

東ローマ帝国では、
1453年の滅亡まで
この法体系が維持

君主論以前の国家観

宗教

神がこの世を支配

道徳

神の教えは絶対的

支配

運命

君主の行動

理性によって
情念や欲望を抑制させる

国家・民衆

宗教や道徳を受け入れていく政治

誰も運命は変えられない

君主論の国家観

君主

資質

力

狼の度肝を抜く
『獅子』

合理性

罫を見抜く
『狐』

される
体現

君主の自由意志

ヴィルトウ
(力量)

情念や欲望を發揮する

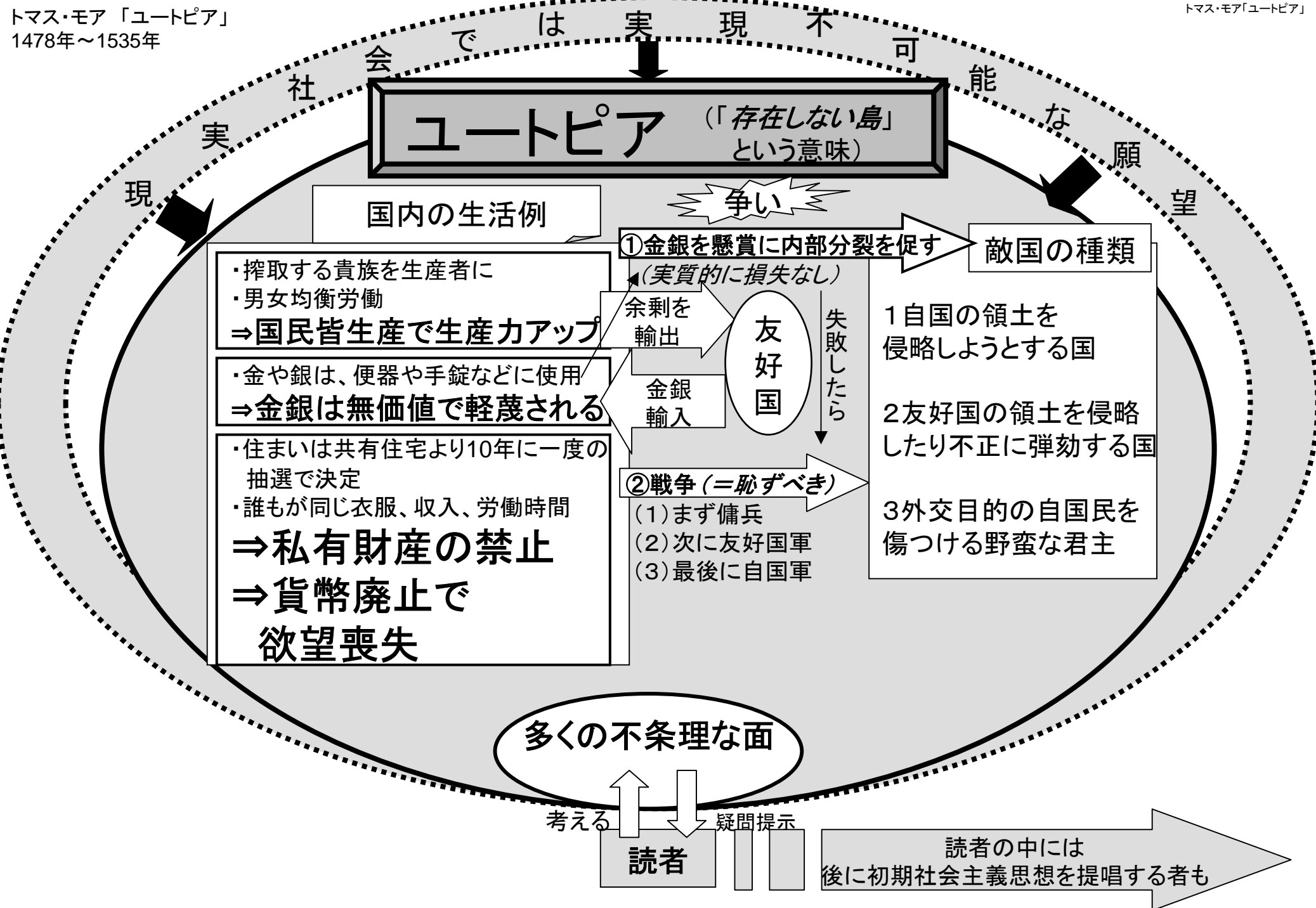
変える

運命

宗教や道徳から脱却した政治

君主の行動次第で
運命は変えられる





ユートピア (「存在しない島」の意味)

国内の生活例

- ・搾取する貴族を生産者に
- ・男女均衡労働
- ⇒国民皆生産で生産力アップ
- ・金や銀は、便器や手錠などに使用
- ⇒金銀は無価値で軽蔑される
- ・住まいは共有住宅より10年に一度の抽選で決定
- ・誰もが同じ衣服、収入、労働時間
- ⇒私有財産の禁止
- ⇒貨幣廃止で欲望喪失

争い

- ①金銀を懸賞に内部分裂を促す (実質的に損失なし)
- 余剰を輸出
- 友好国
- 金銀輸入
- 失敗したら
- ②戦争 (=恥ずべき)
- (1) まず傭兵
- (2) 次に友好国軍
- (3) 最後に自国軍

敵国の種類

- 1 自国の領土を侵略しようとする国
- 2 友好国の領土を侵略したり不正に弾劾する国
- 3 外交目的の自国民を傷つける野蛮な君主

多くの不条理な面

考える ↑ ↓ 疑問提示
読者

読者の中には後に初期社会主義思想を提唱する者も

キリスト教徒が自由を得るには、ただ信仰することのみが必要である

仰信

身体
たましい

キリスト教徒の
正しい生き方

福音
||
キリストの教え

信仰

ただ一つの
すべきこと

キリスト教徒

得る

自由

解放される

戒め 罪 掟

否定

支配 権力

免罪符

聖職者

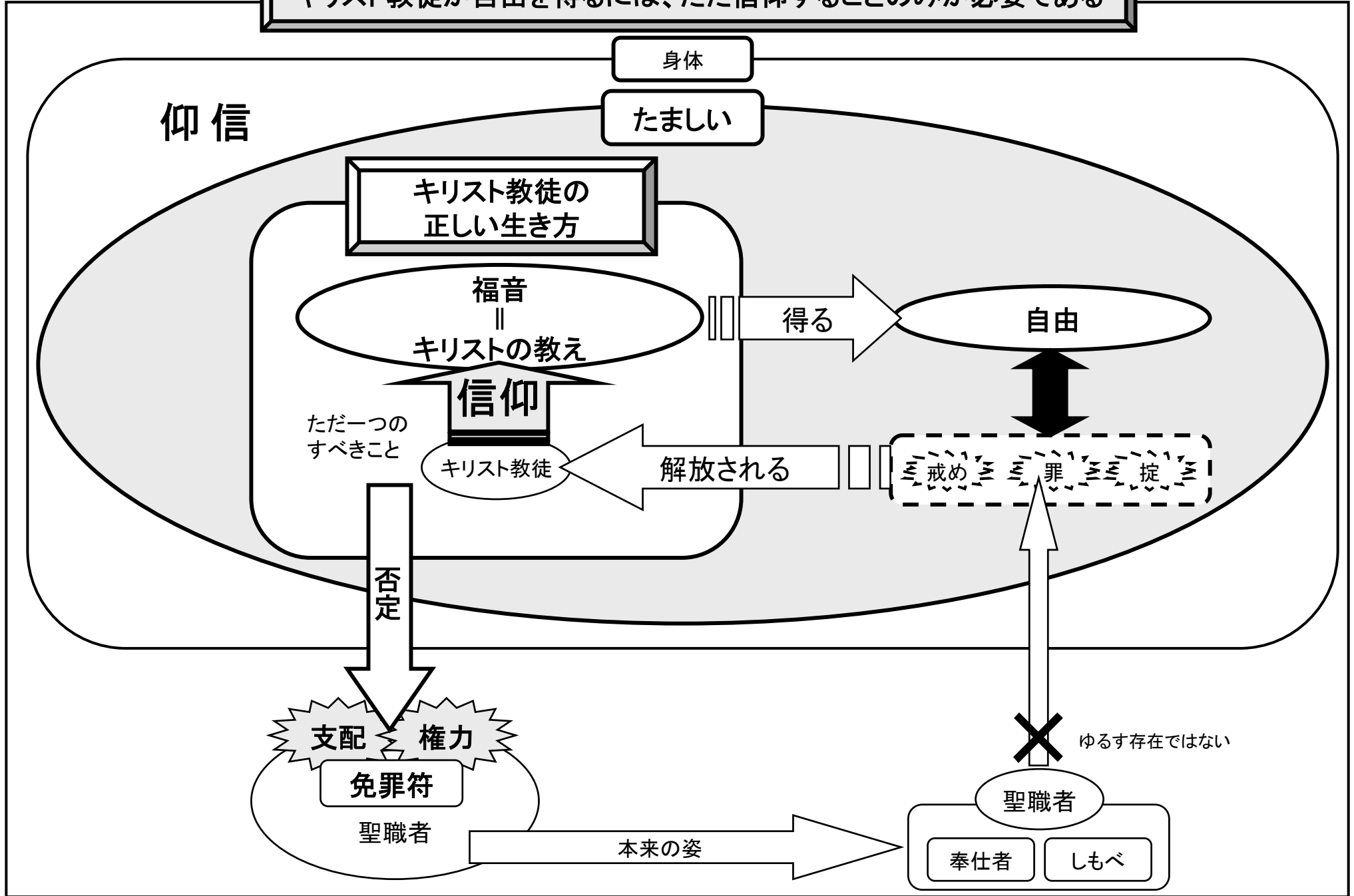
ゆるす存在ではない

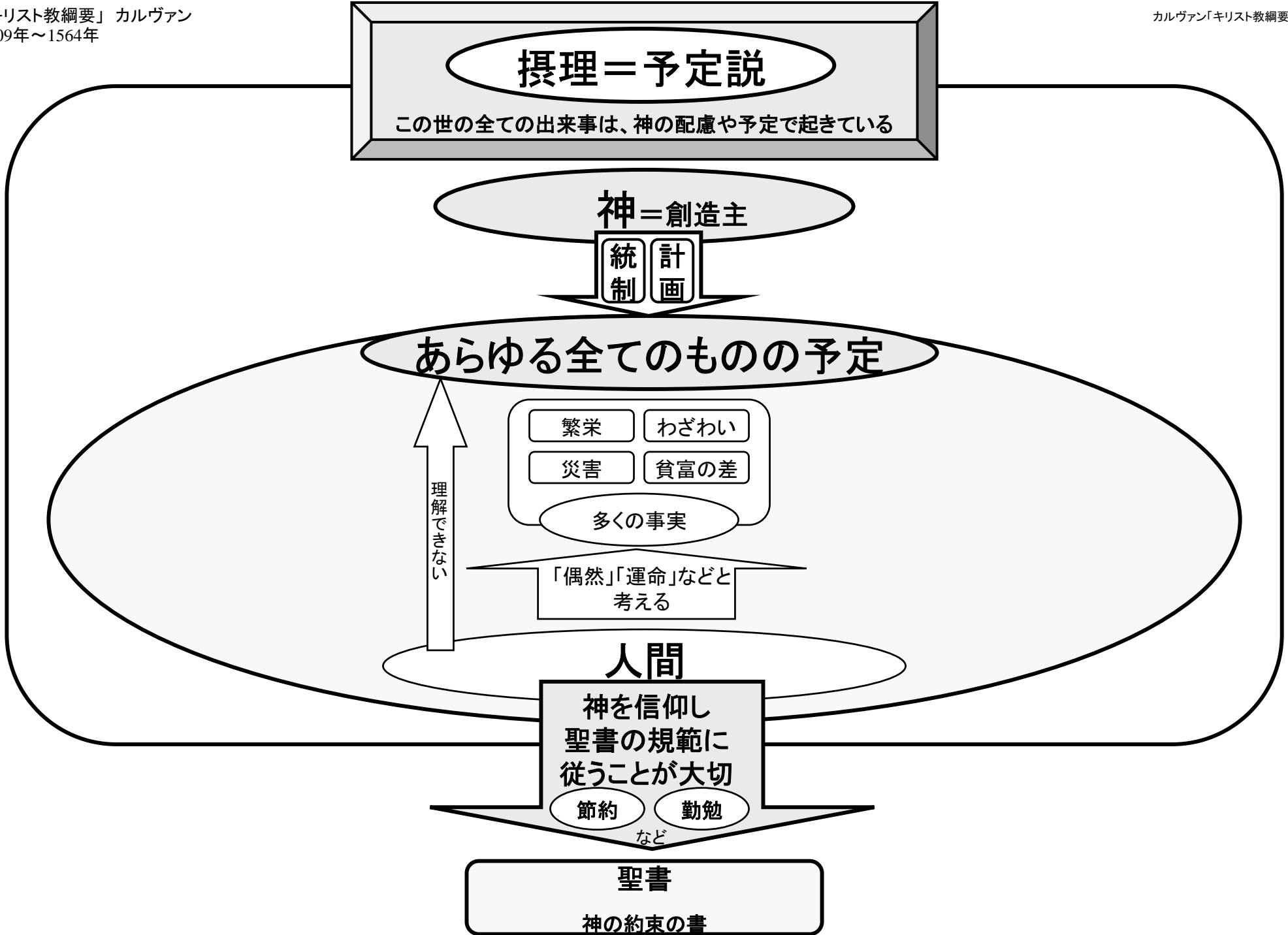
聖職者

奉仕者

しもべ

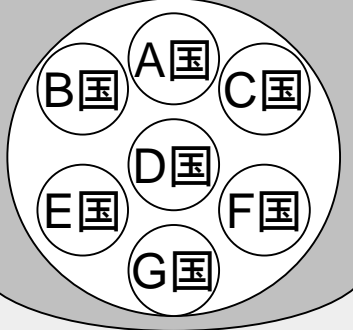
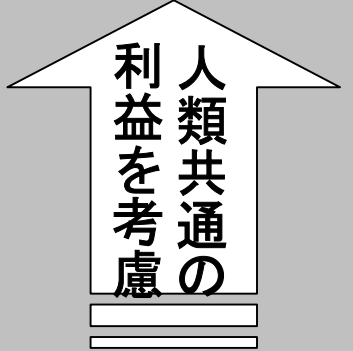
本来の姿



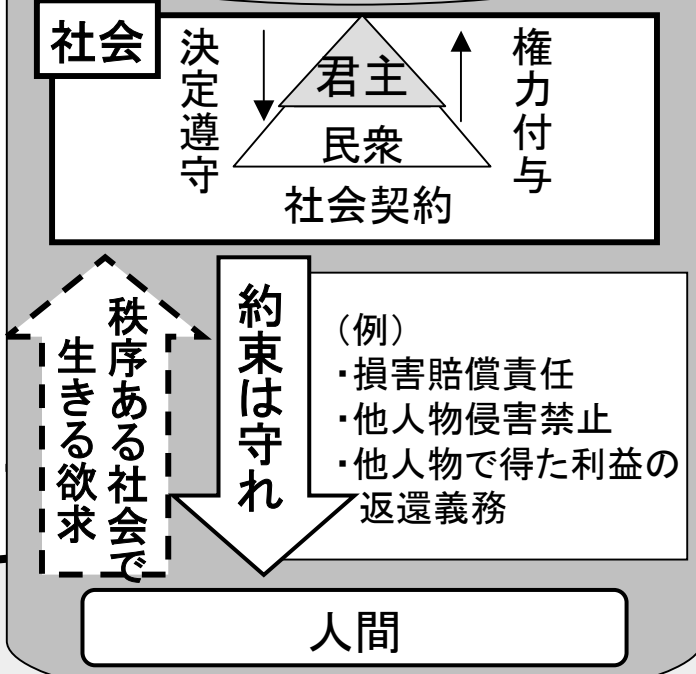


戦争と平和
グロチウス
1583年～1645年

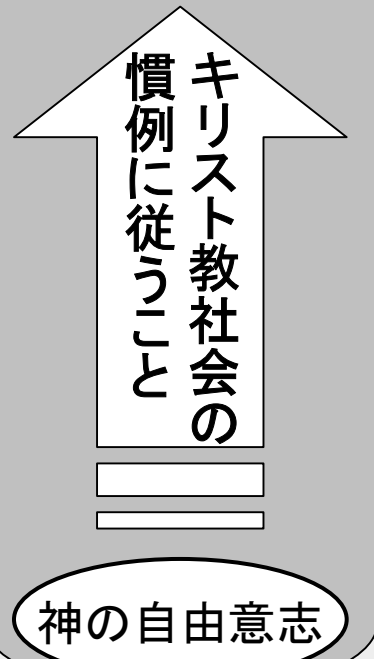
万民法



自然法



神意法



戦争法

戦争は法執行の手段としてのみ認める
(ただし道徳の範囲内でのみ有効)

内在的正義 (道徳 ⇒ 寛容・親切・名誉心など)

法

道徳

三十年戦争の惨状 ⇒ 人類平和のために戦時のルールが求められる
(ドイツ国内の宗教戦争にヨーロッパ諸国が介入)

万人に最も公平に配分されている平等なもの

良識 = 理性

働かせる「方法」が重要

デカルト自身の方法を示すが、読者に強制はしない

実体験が重要

見聞 経験 考察

自分自身のうちに見出される学問が大切

批判

書物による学問

規則

明証性

確実に真と自分が認めたもの以外は真としない

分析・分割

問題を小さく分けて吟味する

総合

思想を単純なものから複雑なものへと導く

枚挙

完全な枚挙と全体にわたる通覧をあらゆる場面で行う

理論的に未決定の間も行動は決定を迫られる

「暫定的な道徳」に従って行動する

最善の職業を選ぶ

デカルトの場合は

法律 習慣 宗教

分別ある人の最も穏健な意見

行動を決定

疑わしくても毅然と行動

× 世界の秩序を変える

○ 自分にうちかつ

真理の探究

方法的懐疑によって考察

疑え得るものをすべて偽とする

絶対確実な真理を発見

哲学の第一原理

我思う、ゆえに我あり

前提

合理論を展開

演繹的に導き出される他の真理の連鎖を提示

自然学の大綱など

コモン・ウェルス
(主権者・人工的人間)
一人の人物または合議体

絶対的権力

社会契約

平和と自己防衛のため
一切の権利を譲渡

創出
超越する存在を
人間個々人の力を

社会契約

平和と自己防衛のため
一切の権利を譲渡

自然法
人間に対して永遠普遍的な法

人民を保護するために
自然権を制限する
ルールを制定

平和な市民国家の誕生

自然状態
国家の規制が存在する以前の状態

闘争状態
万人が万人に対して
敵意

人間(個人)

自然権
生命を保持する権利

自己保存

自分を守るためなら
何をしてもよい

対立

人間(個人)

自然権
生命を保持する権利

自己保存

自分を守るためなら
何をしてもよい

平和ではない状態

「パンセ」パスカル
1623年～1662年

悲惨さ

相反する両極に引き裂かれ
矛盾に苦悩する
神なき人間

偉大さ

人間は自然のなかで最も弱い一本の葦にすぎない
だが、それは考える葦である

限度をわきまえよう
人間は何者かであって、全てではない

もしもクレオパトラの鼻がもっと低かったなら、
世界の歴史は変わっていたらう

人間は一つではなく、同時に二つの極端に達し
その中間を満たすことで偉大さが示される

不合理に見える諸事実に、理由を見出し
仮の秩序をうち立てて、仮の平和を得る

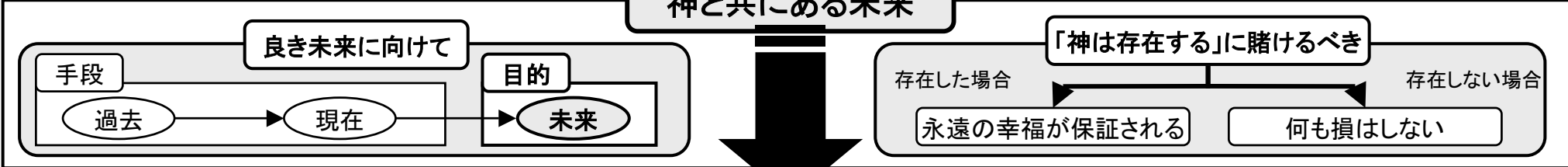
人間が偉大な面は、自分の悲惨さを
知っていることである

- 本質的思考から目をそらし
気ばらしに走る
- | | | |
|----|-----|----|
| 娯楽 | 賭け事 | 会話 |
| 仕事 | 政治 | 戦争 |

より悲惨な状況におちいる

求める

神と共にある未来



イエス・キリストへの信仰によって人間は救われる

聖書のメッセージの本質

イエス・キリスト来臨の告知 目標は愛

至福

序章

定義	物質の量⇒”質量“ 運動の量⇒”運動量“ 受動的な力⇒”慣性”
第1法則	(ガリレオ等に由来し)物体の状態の継続 =慣性の法則
第2法則	すべての力が加速を引き起こす 力が倍になれば加速も倍になる
第3法則	すべての作用には反作用がある

第1巻

ケプラーの第2法則(惑星と太陽とを結ぶ線分が一定時間に描く面積は一定)を物体運動的に証明

影響

逆2乗の法則(物質は距離の2乗に反比例して引かれる)の証明
ハレー彗星の回帰の証明に寄与

万有引力の提唱
重力が地球の表面でのみに限られて存在するとされていた時代からの転換

第3巻

月

惑星

ケプラーの第3法則(太陽と惑星との間の平均距離の3乗とその惑星の公転周期の2乗との比はどの惑星でも等しい)を証明

潮汐を説明

地球

- ・自転により偏平
- ・重力は各地表点で相違
- ・春分点の移動

一般理論を月や惑星、彗星に適用

『プリンキピア』
(自然哲学の数学的原理)

近代数学・光学・力学
天文学の基礎を構築

第2巻

抵抗物質内の物体運動の研究

デカルトの主張
渦巻きの中のコルクのように“惑星は物質的な渦に巻き込まれている”

デカルト
目標
若き頃のニュートン

“波の幅”(=波長)の解析
音波・光の法則を発見・補足

振り子の運動

適用 ↑
発見 ↓

振り子の運動とU字管の水の上下運動との数学的、物理学的な類似性

自然状態

国家の規制が存在する以前の状態

平和

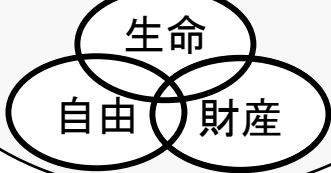
自然法

最も生活の利益と便宜とに
結びつくようなルール

無駄にしない範囲に
制限する

所有権

自然を人類にとって
有益なものにする権利



生存権

人類共通財産が増加

しかし

貨幣の発明 ↓

財産の不平等化

社会状態

法や国家を人民がコントロールしている状態

政治機構

行政権

連合権
(外交権)

立法権
(最高権力)

政治権力が
必要になる

譲渡

社会契約

人民の権利を
侵害

その
場合は

抵抗権を行使し立法権力を
排除するか変更する

抵抗権

統治者を変更する権利

所有権

自然法
執行権

平和状態を維持するための権力を持つ

人民主権の社会

原理＝経験的・因果法則的な認識方法を法の分野に導入

3つの条件が合致するところが、法のあるべき姿

法の相互間関係の条件

法の目的 ↔ 合致 ↔ 法の効果

法の精神
＝法のあるべき姿

気候
地質 場所
法はその地の自然と相関性が必要

宗教
習俗 性向
法はその地に住む人の生活と相関性が必要

自然的条件

精神的条件

法

濫用

権力者

三権分立の原理

立法権

議会
法を作る権利

裁判権

裁判所
法の運用を監視する権利

執行権

君主
公の議決を執行する権利

抑制
抑制

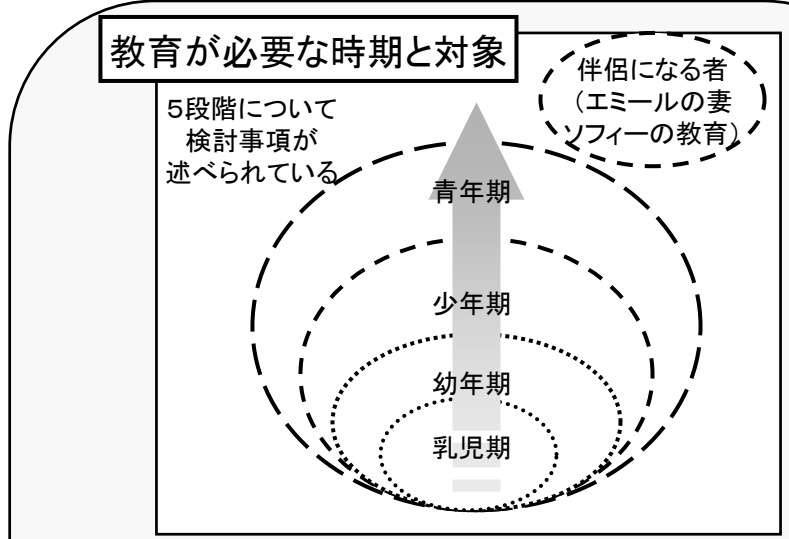
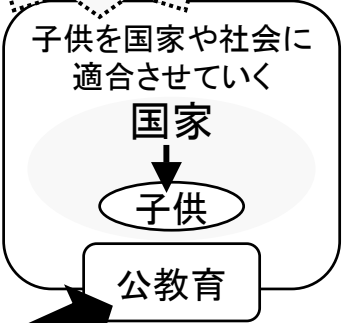
抑制
抑制

抑制

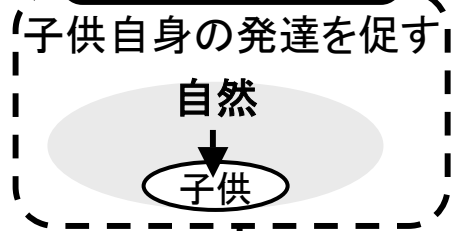
抑制

個別的家庭教育で自己を確立していれば
実社会の困難を克服できる大人になれる

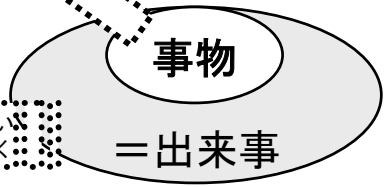
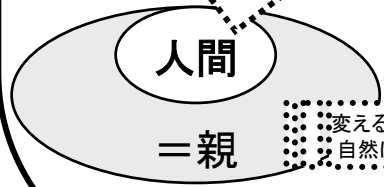
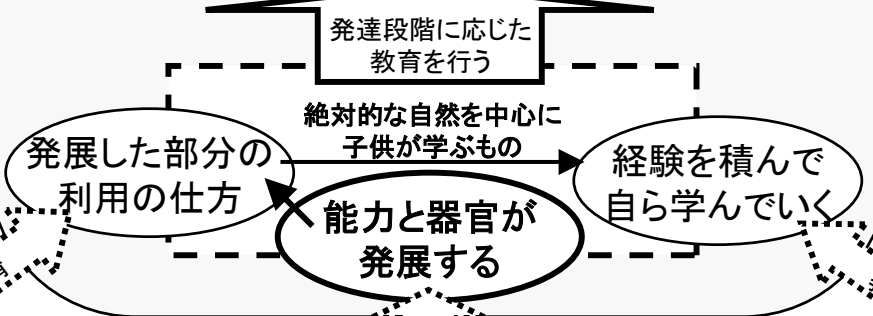
型にはまった教育で
自己を確立できず
自立できない人間になる



家庭教育

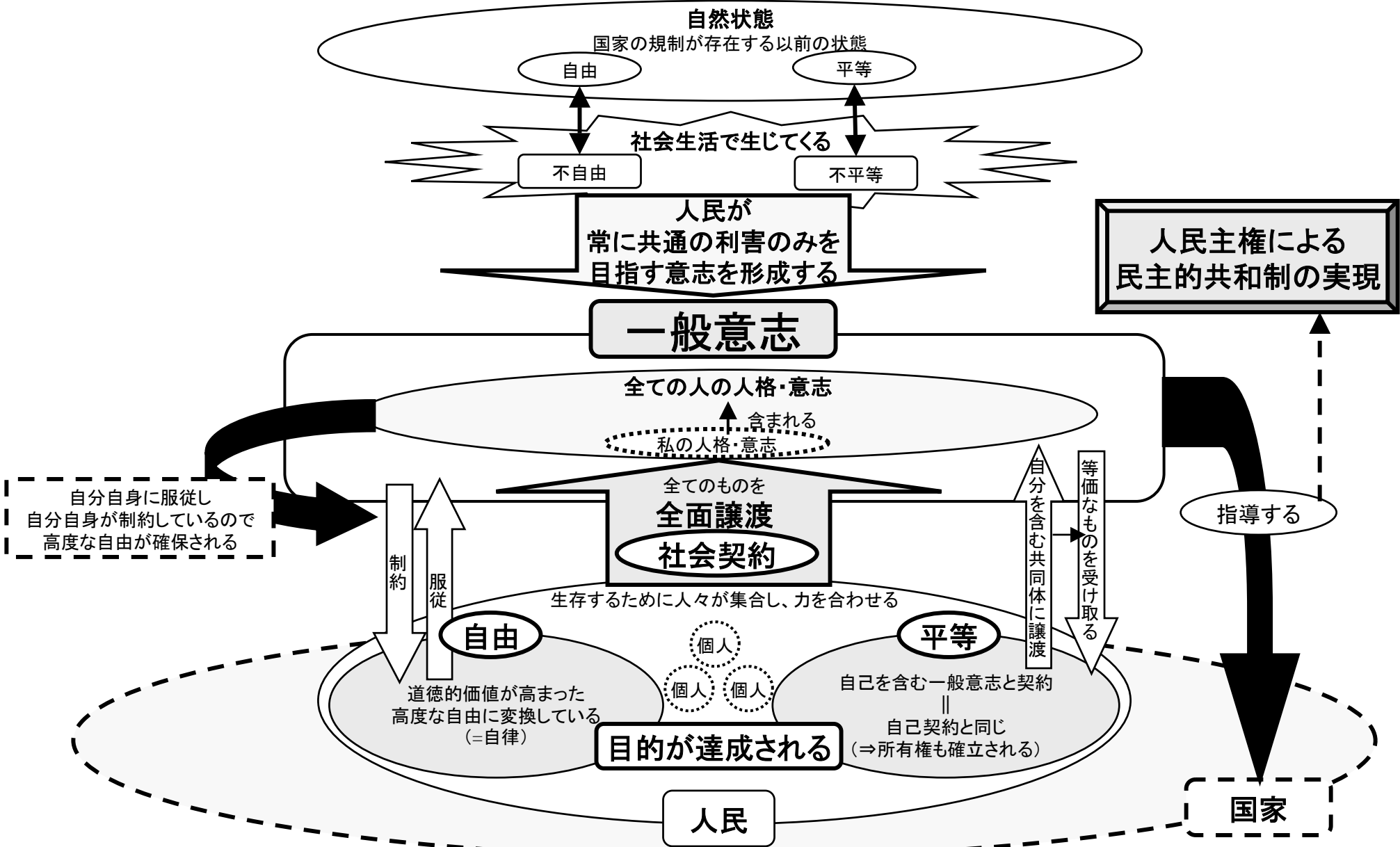


子供の教育は
家庭で行え



自然と人間と事物が
子供を教育する

自由・平等な社会を実現するためには、社会契約によって人民主権の政治体制を形成することが不可欠



重商主義

商業を国家の重点政策とする考え

強制的な国家

輸出奨励

輸入制限

独占的な支配

金属貨幣の獲得が目的

他国

自国

植民地

否定

封建制度

土地を媒介とする主従制度
領土

封建領主

支配

農奴

権力が集中

否定

当時の社会制度

批判

生産の構造を解明し 自由主義経済の合理性を提唱

小さな国家

最低限度の国家体制

- 国防
- 司法
- 若干の公共事業
- 保護

自由競争経済

神の見えざる手 (価格の自動調整機能)

市場価格

収束

自然価格

等価交換の原理

成立

平均利潤率が成立

資本額に比例した収入

階級社会の明確化

(資本家は資本額に比例する利潤を得る)

農民

商工業者

地主

市民層の稼ぎを

区別

資本家

労働者

地主

利潤

賃金

地代

三大階級を区別

自由貿易が必要

保護と抑制の政策は、自然な流通を妨げ
分業構造を歪曲する

分業の推奨

(労働の生産物が交換されあう)

作業を
分業

職業の
分化

生産効率
向上

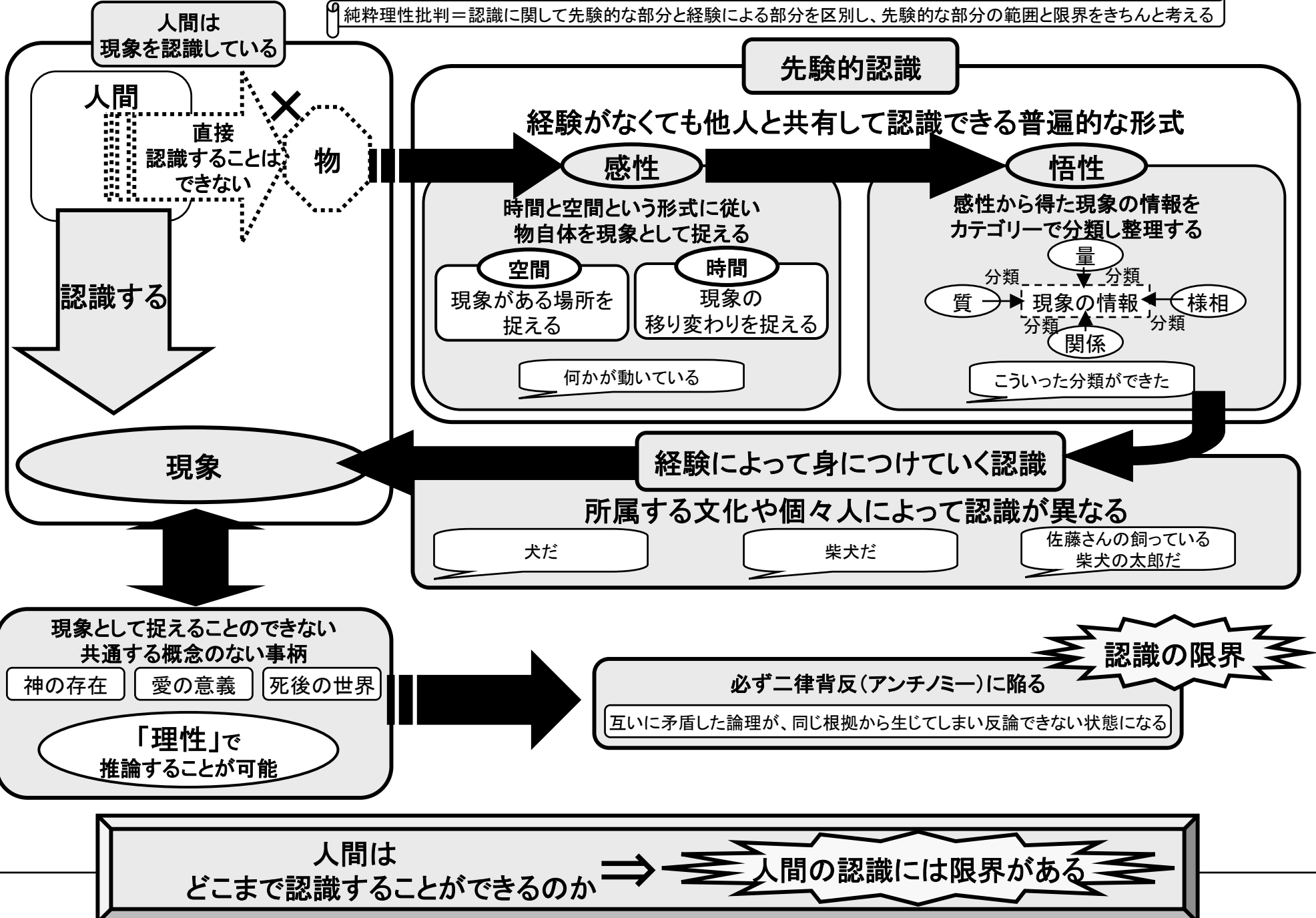
生産力が発達

労働量によって
同価値の
生産物を交換

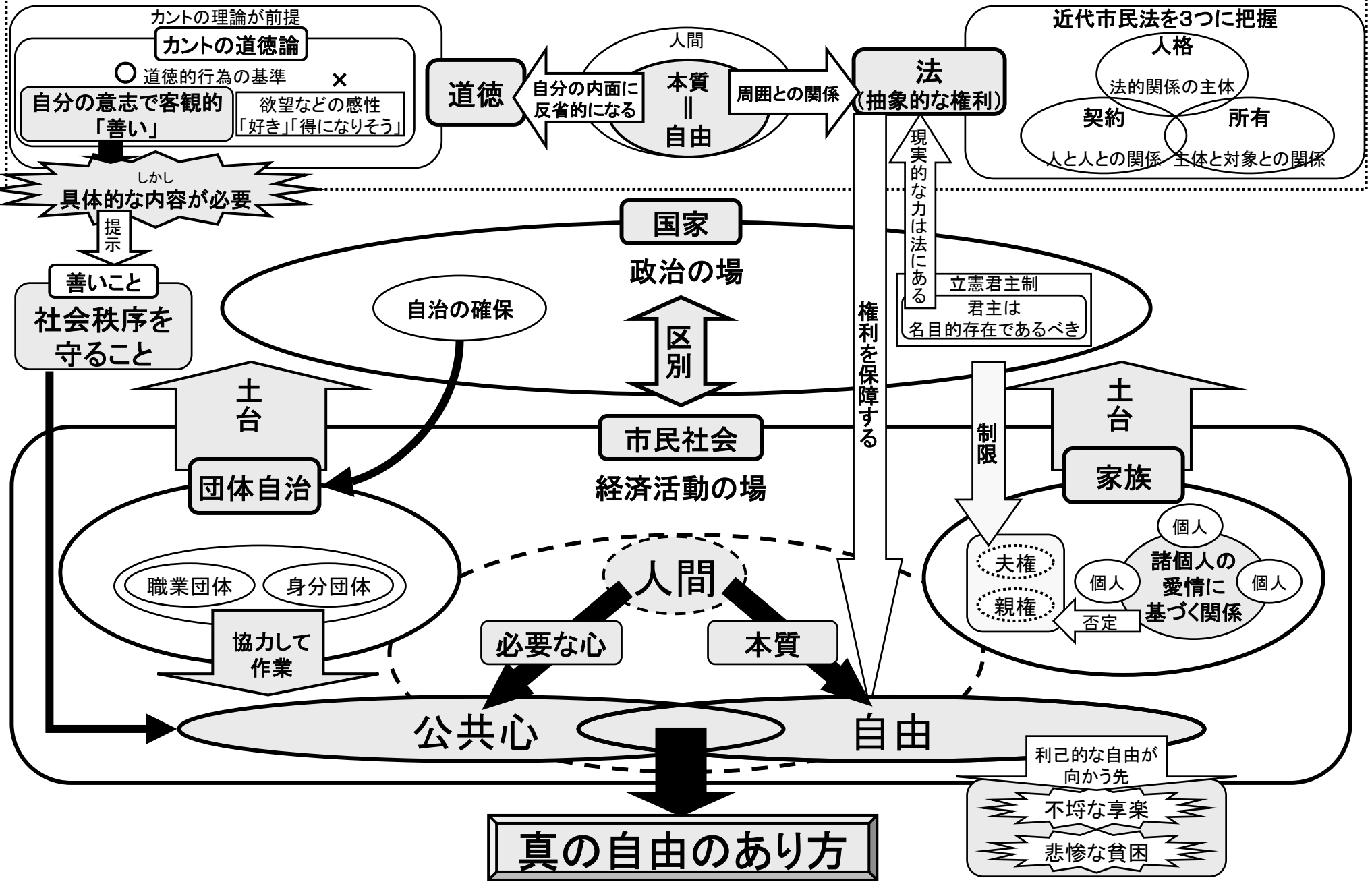
拡大再生産

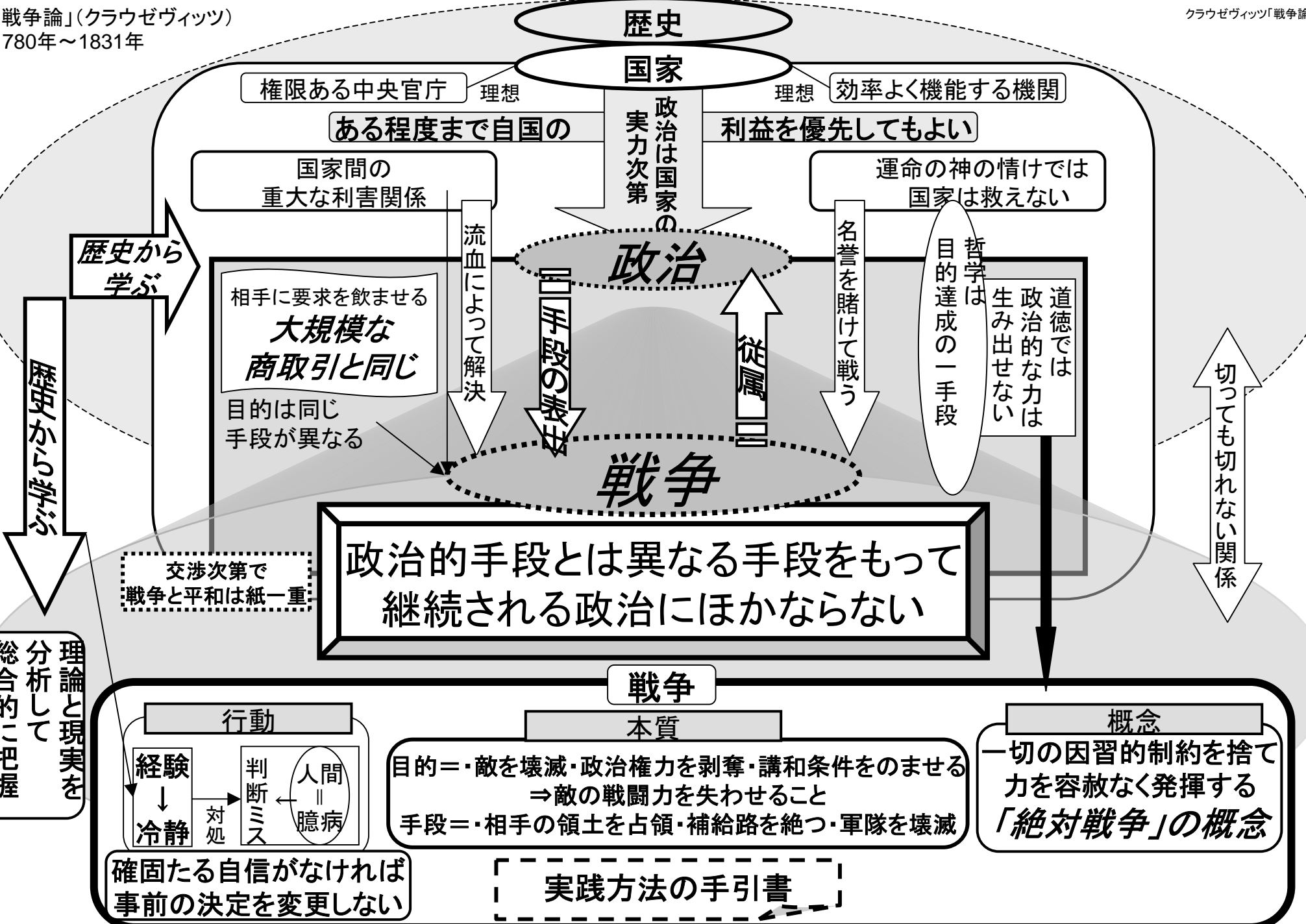
主に資本家が節約し全て消費せずに
投資にまわすことで、生産規模を拡大していく

純粋理性批判＝認識に関して先験的な部分と経験による部分を区別し、先験的な部分の範囲と限界をきちんと考える



公共心のある自由が、真の自由のあり方である





当面の目的

本来の目的

究極の目的

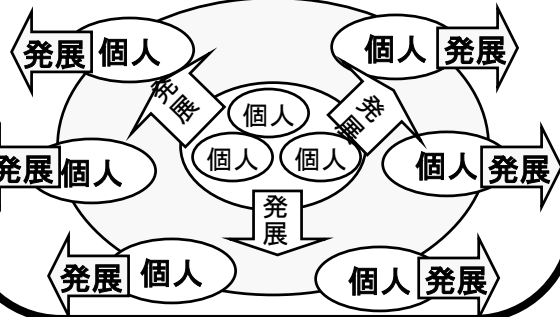
革命によって
労働者の手に政治的権力を獲得する

階級差別をなくす

結合社会の形成

各人の自由な発展が
万人の自由な発展の条件で
あるような社会

個体的所有の実現



自分 の活動を自分のものにする

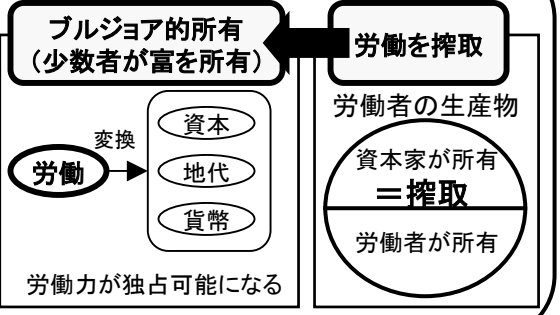
共産主義
労働者が主役の社会

- 否定
- 反動的社会主義
 - 保守的社会主義
 - 空想的社会主義

資本主義
労働者が脇役の社会

他人 の活動を自分のものにする

私的所有の社会

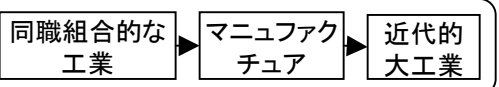


時代背景

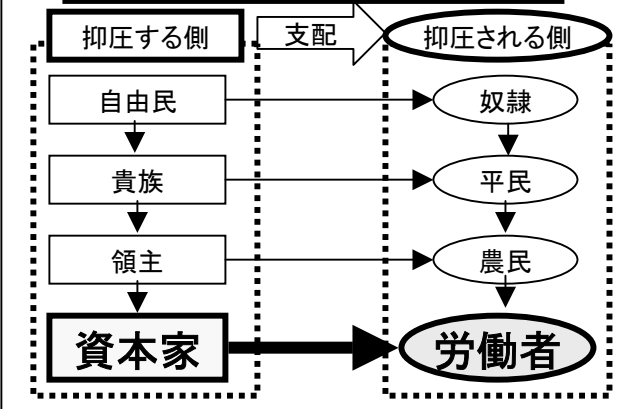
自由競争に適した
社会を作り上げる

ブルジョアの形成

富 政治権力



これまでのすべての社会の歴史は
階級闘争の歴史



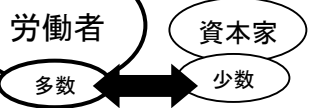
労働者が
支配する側になる

革命後

例

- 国によって
方策は異なる
- 土地の国有化
- 相続権廃止
- 万人平等の労働義務

多数の意見が
反映されるのは当然



労働者が団結し
革命を起こすのは
必然的

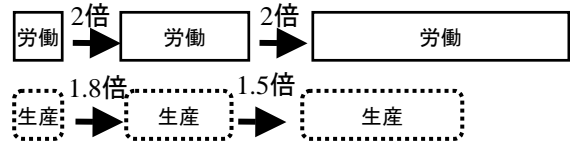
生産力の発展と人口増加の制限によって、豊かな社会へと進歩できる

生産に関する法則

人間の力が及ばないため条件は変更できない

土地収穫逓減の法則

ある一定の土地に投入される労働や資本が比例的に増加しても、生産物は逓減する率で増大する



人口が増えてくれば必然的に貧しくなり、社会も停滞していく

対策

具体的な対策方法

生産力の発展 + 人口増加の制限

生産力の低い社会では、人口抑制もうまく機能しない＝相関的

人間性が向上する

改良できるようになる

- 法規
- 慣習
- 制度
- 教育
- 世論

変更できるようになる

分配法則の変更

社会主義的な改革

資本家と労働者

雇主と労働者が共同組織

最終的に初めからこの形態の場合もある

労働者同士が共同組織

必要

民主主義的思考

- 自由
- 個性

暴力的な改革
中央集権は否定

変更不可能

変更可能

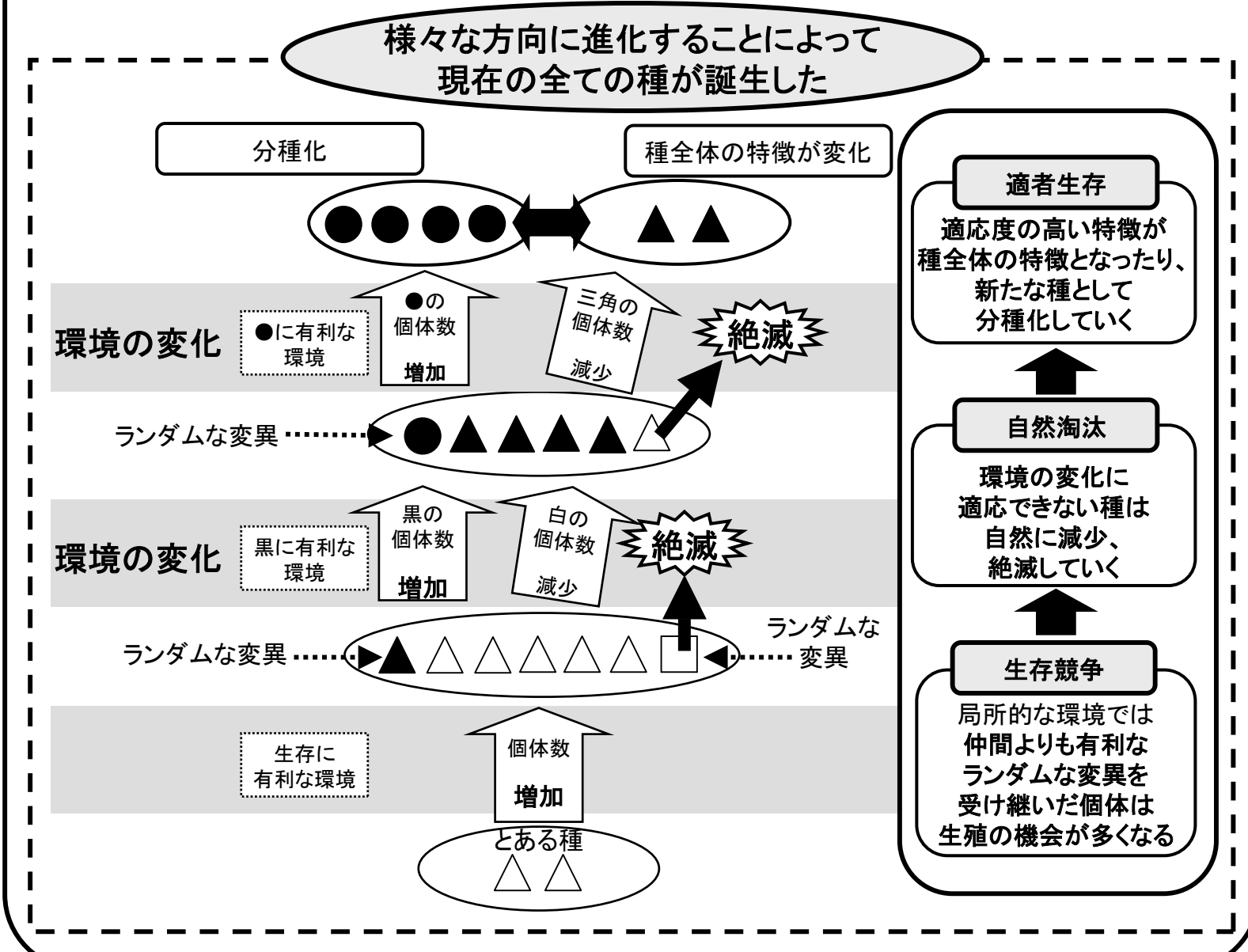
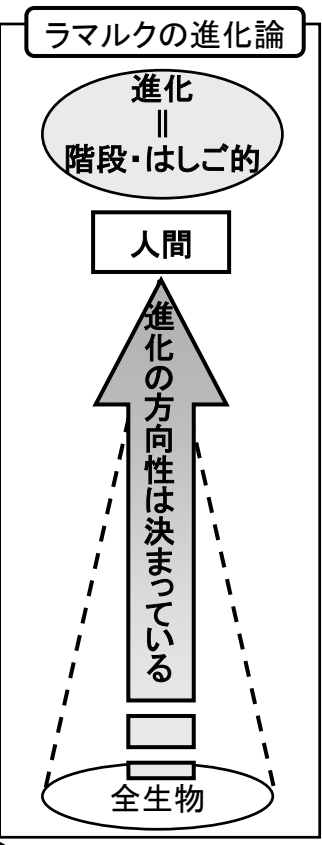
個人などの人間全般

社会

変更可能な、人間の知的・道徳水準の向上によって対策をする

ダーウィンの進化論 自然選択論

ダーウィン以前の種や進化に対する考え



人間が幸福を実現するためには、
個人の自由は最大限尊重されなければならない

個性豊かな人間が
豊かな社会・国家を
形成していく

「自由論」 J・S・ミル
(1806年～1873年)

社会
個人の自由を
最大限尊重

自分

他人

自由な選択で
個性を発達させていく

- 団結
- 思想
- 出版
- 嗜好
- 職業
- 良心

自分自身に関わる欠点も
個性の一種

- なまけ
- 浪費
- うぬぼれ

規制しない
しかし
規制する
法や道徳(世論)で
(この場合のみ)

行為

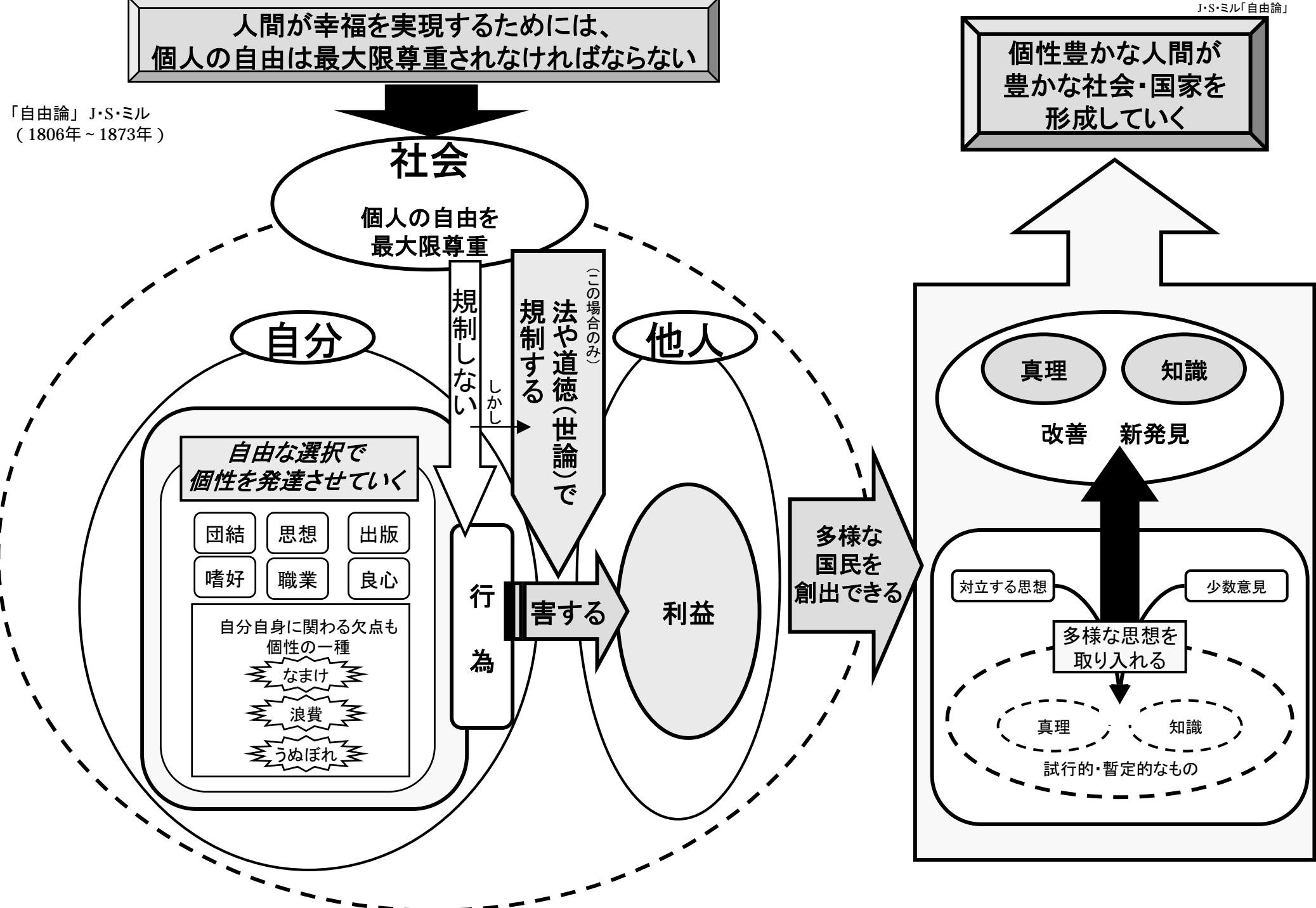
害する

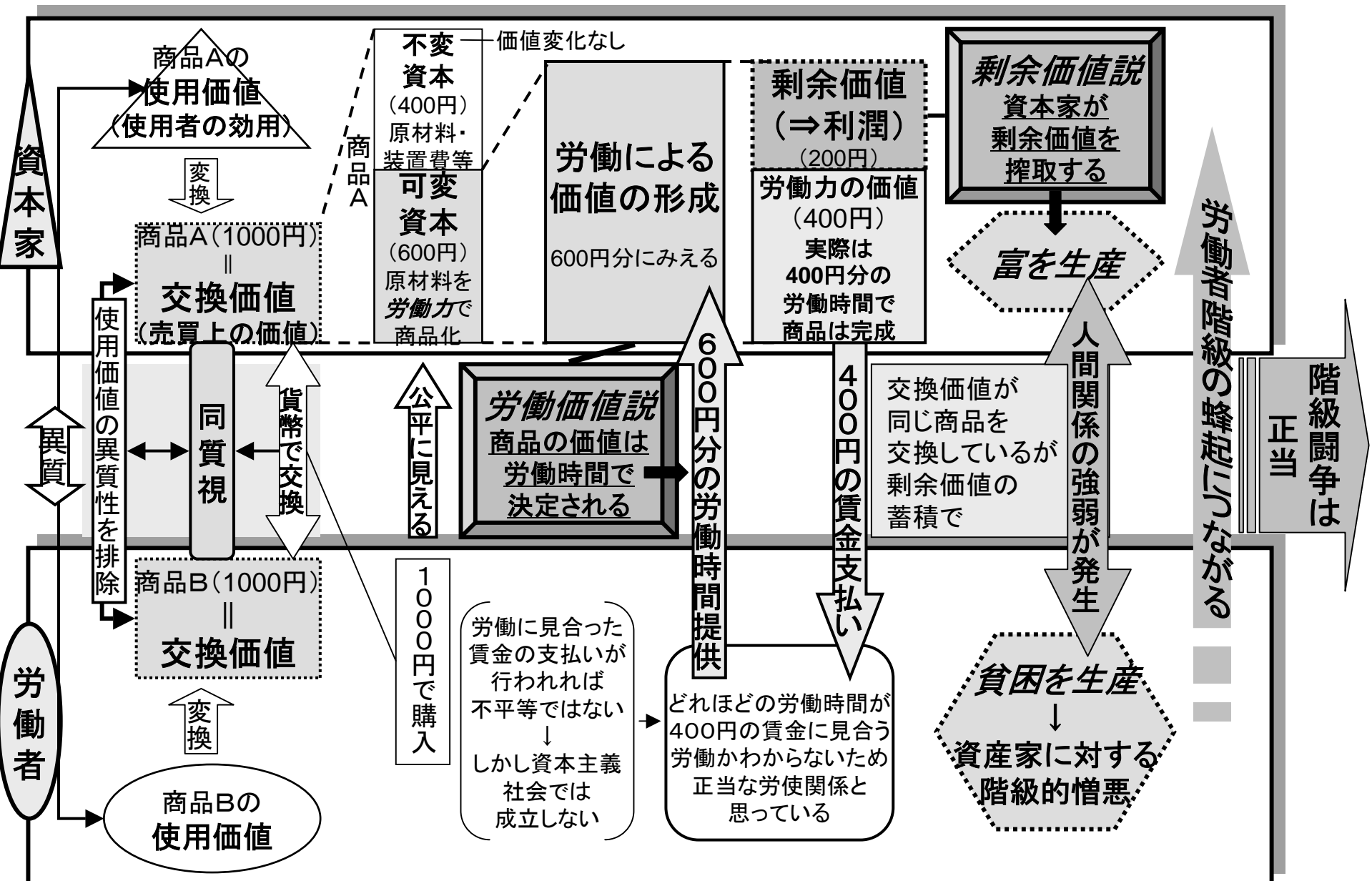
利益

多様な
国民を
創出できる

真理 知識
改善 新発見

対立する思想 少数意見
多様な思想を
取り入れる
真理 知識
試行的・暫定的なもの





必然的に資本主義社会は崩壊し、社会主義へ

これまでの社会における伝統的な思想

信仰

哲学

キリスト教の道德などの超越的価値

神は「いる」

真理は「ある」

主張こそ異なるが、真理に到達することが目標ということは共通

失敗した弱者が成功した強者をねたむ(ルサンチマン)

自分は不幸だが最後の審判で救われる

今の生き方を否定する

自分が失敗したのではなく他人が真理を理解していないだけ

ルサンチマンに陥った理由

これまでの生きる土台は本当は存在しなかった

~~神~~ ~~イデア~~ ~~真理~~

物語の形式でニヒリズムの超克を模索

ニヒリズムが明らかになる

絶対的なものは何もないという思想

ニヒリズムの究極の形式

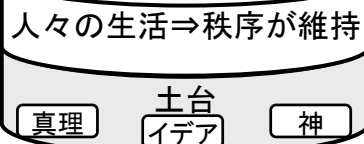
永劫回帰

歴史に目的や方向があることを否定

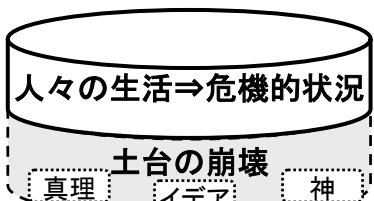
⇒全ての存在が

何度も同じ順番で繰り返される

失敗も成功も、全く同じ人生が繰り返される



価値の崩壊



現実から目を背けず、ニヒリズムを超克しなければならない

現実の全てを肯定し(運命愛)、自分自身に誠実で力強く生きることが大切

「力への意志」が必要

自分自身をより成長させようとする意志

理想像

超人

神や真理など従来の価値に代わり、力への意志を体現した人間の超克された姿(主人公ツァラトゥストラで表現)

資本主義の発達に、プロテスタンティズムの倫理が大きく影響している

カトリシズムの倫理
 聖職者などに
 倫理的態度を求める

キリスト教で求められる
禁欲
 欲望を抑制して
 目的に向かって全力で行動する

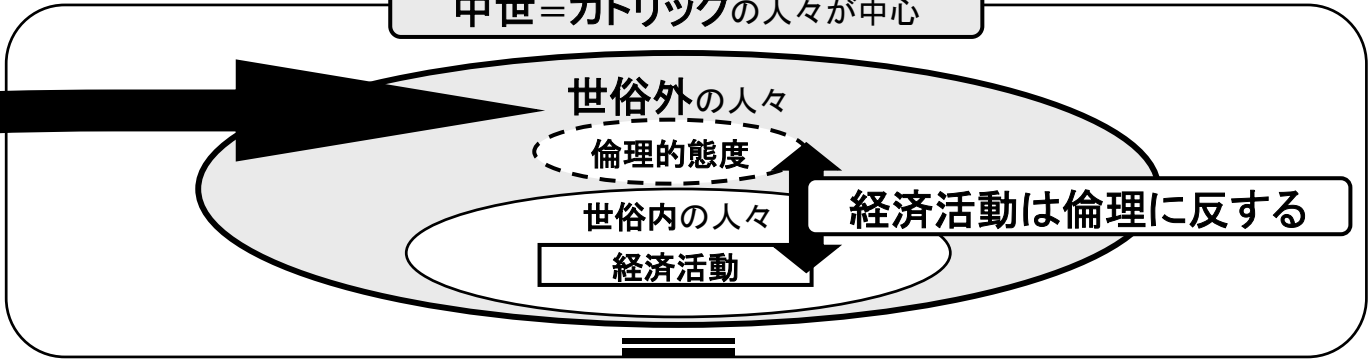
プロテスタンティズムの倫理

プロテスタンティズムの教え
「予定説」の考え
 この世の全ての出来事は
 神の配慮や予定で起きている

中産階級など庶民に
 倫理的態度を求める

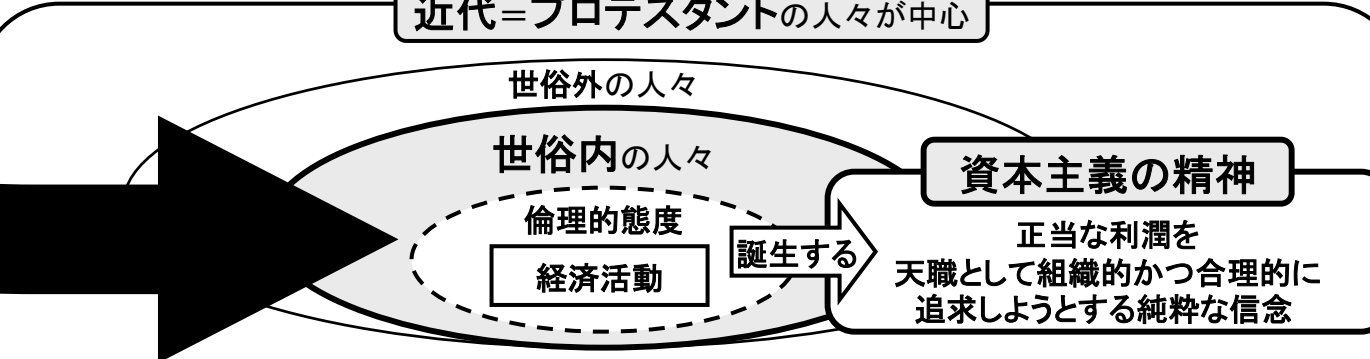
天職義務
 神に救済されるには
 神の使命である世俗的な仕事に
 いそしまなければならない

中世＝カトリックの人々が中心



宗教改革

近代＝プロテスタントの人々が中心



ぜいたくせずに職業労働で正当な利潤を得る経済活動は倫理的なこと

富の蓄積が進む

資本主義が発達

合理化ばかり進み
 信仰心が失われつつあり
 資本主義の将来は
 厳しくなる

人間の行動は「無意識」が大きく影響している

神経症

強迫神経症
など

同性の親との葛藤
男性＝エディプス・コンプレックス
(母親に対する愛情が深すぎる＝マザコン)
女性＝エレクトラ・コンプレックス
(父親に対する愛情が深すぎる＝ファザコン)

夢

自分でも
意味のわからないものになる場合もある

錯誤行為

言い違い

聞き違い

もの忘れ

自我

社会生活を送っていくために自分自身を調整する

夢の検閲

内容が歪められる

行為を妨げる

抵抗

抑圧

あふれ出す

無意識

本人が知らない自らの欲望・願望・意図

抑圧

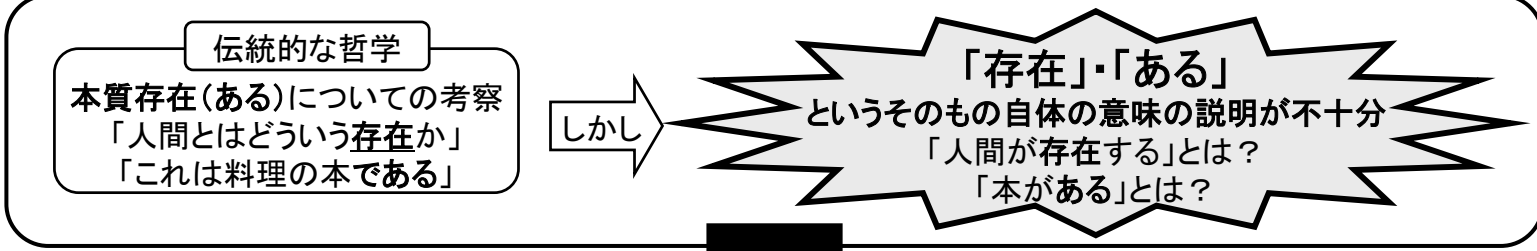
性的願望

無意識の多くを占める
乳幼児期の段階で既に発生

意識できない
何らかの願望

意識できない
自分の意図

「存在と時間」
ハイデガー
1889年～1976年



「存在」の意味を探究

世界内存在
人間は存在者が集合する世界と
関わりあって存在している

人間
現存在
存在が現れる場所

人間が存在者を意識し
意味を与えてはじめて存在する

「水を飲むための」コップ
「思い出の」コップ

関心を持つ
(気遣う)

しかし

意味を
与える

存在者

物質や他人など
コップ
コップ
存在となる

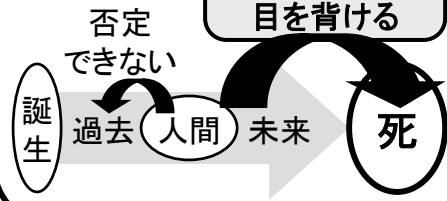
存在は
人間の関心と
切り離すことが
できない

無関心な人間の増加

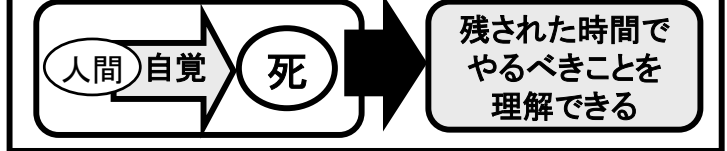
自分の死を
他人事とみなし
目を背ける

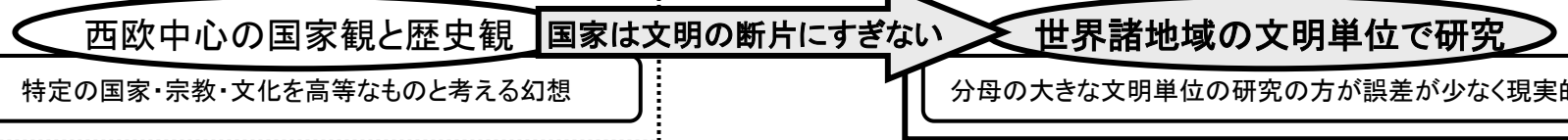
生きる意味を喪失

死を自覚して
自分の存在の有限性を
知ることが重要



いずれ自分が死ぬことを
きちんと認識できず
落ち着きなく関心を移し
不安から逃れようとする





文明の発展法則

発生

成長

没落

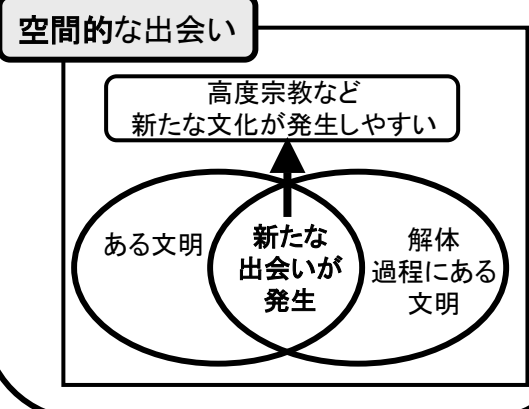
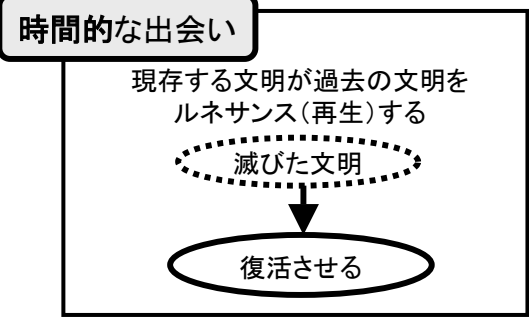
解体

文明と文明の
出会いの
結果

指導者たちが
自己決定力を
増幅していく

指導者が
ミス
創造力を持たない
大衆の訓練方法
(制度制定など)が
指導者の意図しない方向に
向かっている状態

指導者が暴力で
地位にしがみつくと
人々が
逃げ場を求める

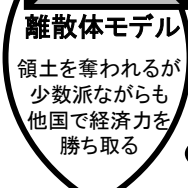
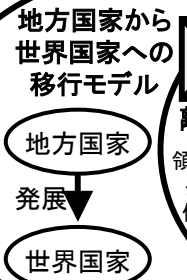


文明モデル

ギリシャ

中国

ユダヤ



独立文明
14文明

衛星文明
17文明

流産文明
6文明

世界国家

英雄時代

一文明の全てを
包含する
人類全体が
政治的統一体にまとまる
先駆的な形態

蛮族が
破壊的襲撃によって
荒廃した本拠地で
東の間の英雄時代を
迎える

高度宗教

歴史から
死んだ文明を
掃き出す

新たな文明を
生み出さない

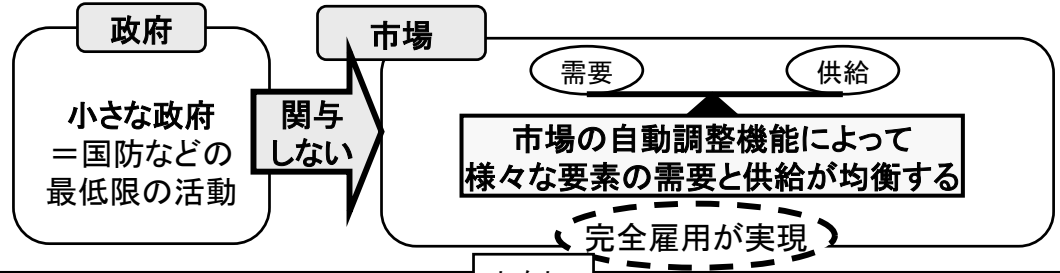
独立する

世界教会

例
キリスト教
大乘仏教

古典派経済学＝自由放任政策

市場で自動調整が行われるので、政府は経済活動に介入しない方が良い

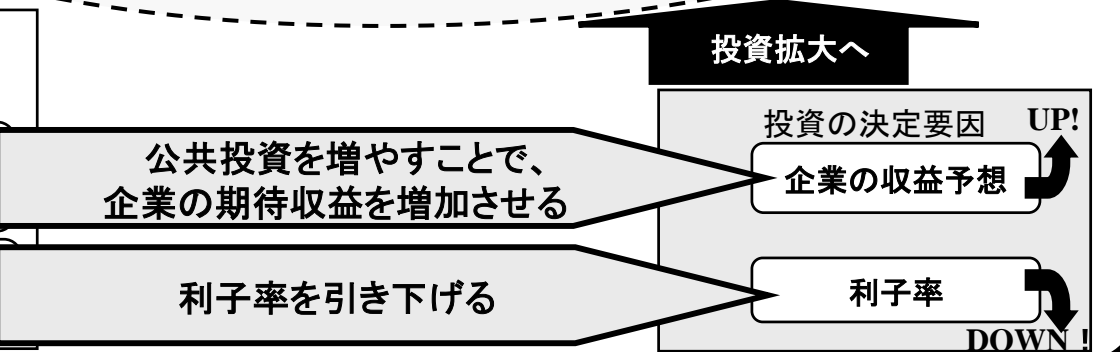
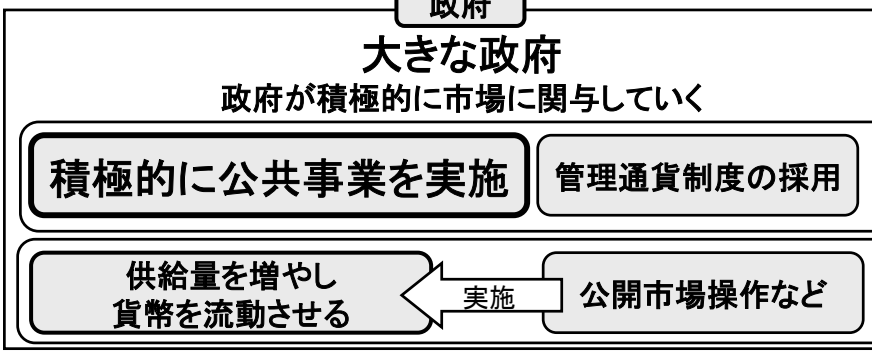
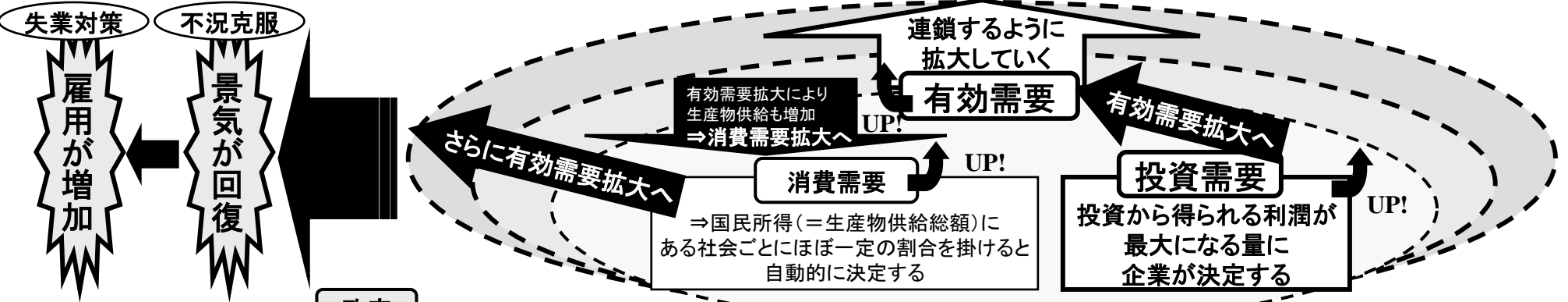


しかし

1929年世界恐慌以降⇒失業者が増大

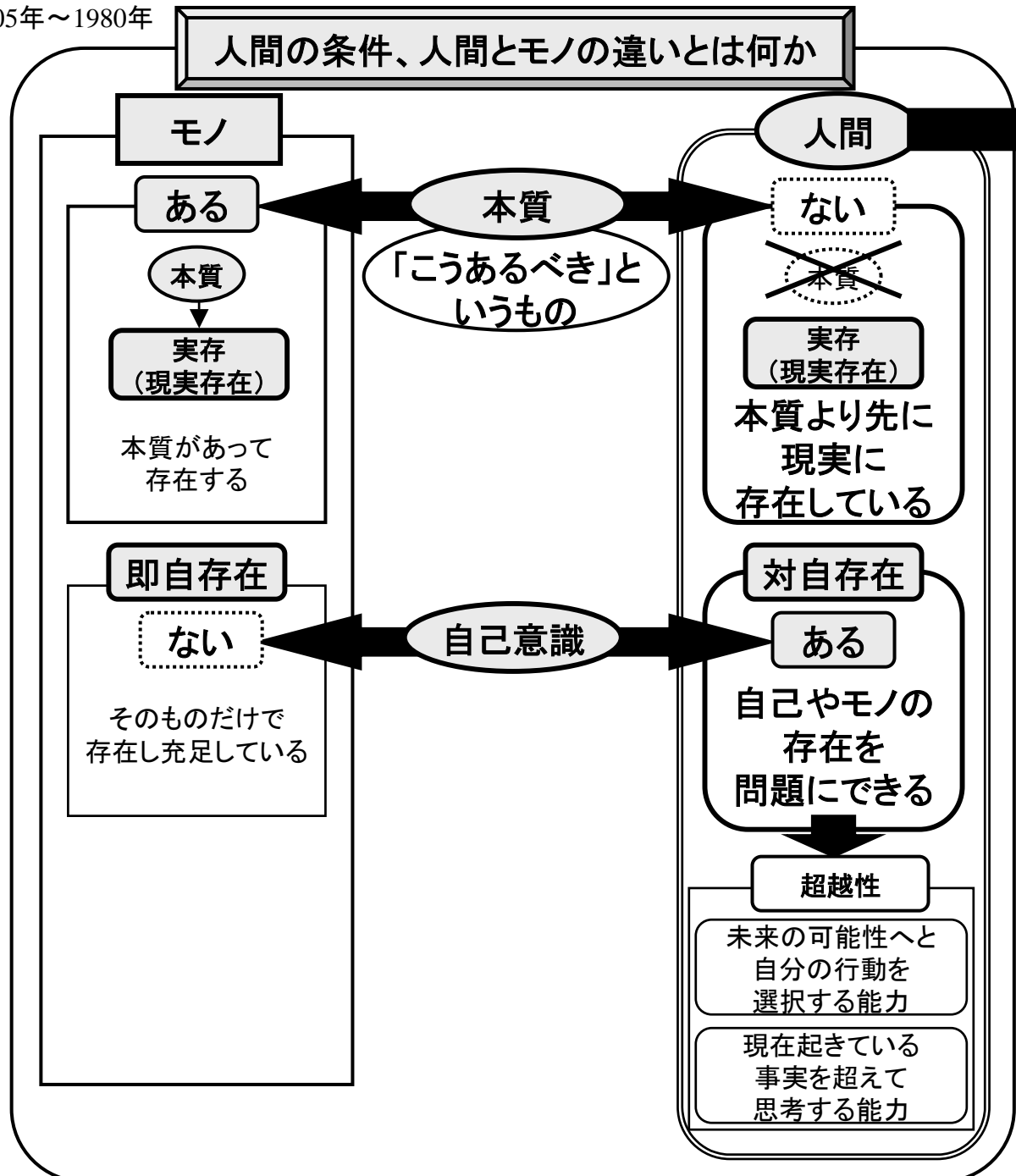
失業対策と不況克服のための新理論を提唱

政府が積極的に財政支出を行い、社会全体としての生産物需要を増やし、企業活動を活発にして雇用を増やす

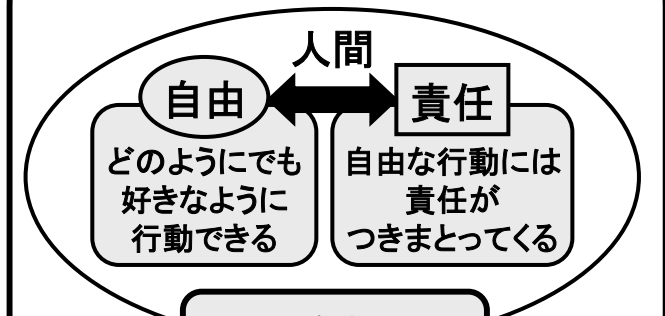


1905年～1980年

人間の条件、人間とモノの違いとは何か



人間は
根拠も方向性も
無い存在

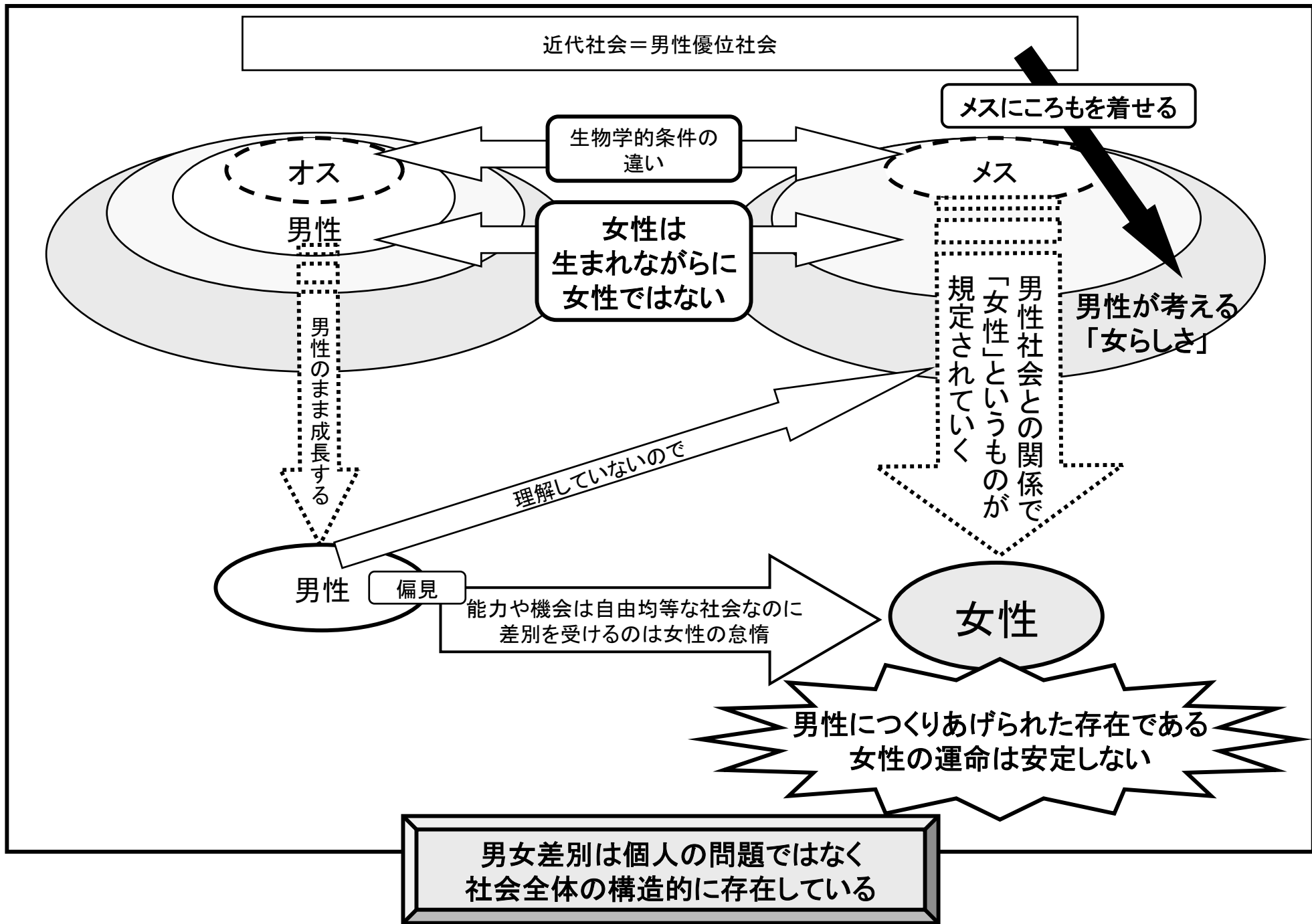


人間は自由の刑に
処せられている

自分自身の選択は
全ての人類を拘束する

アンガージュマン
(社会参加)

自由な人間は
行動に責任をもって
生きる必要がある



従来の歴史研究

時代のつながり

記録の解釈

過去を再構成

資料から出来事や価値観を取り出すこと

絶対優位性を持つ人間が歴史を作っているという認識

フーコーの主張

特定の間が歴史を作り上げているのではない

ある発言行為が生じることとなった、その時代の社会構造を明らかにしていくこと(考古学=アルケオロジー)が、歴史研究では重要

考古学の分析手法をモデルにする

明らかにしていくことが重要

資料集成 (アルシーブ)

言説に働きかける 規則(無意識的社会構造)

言説 (ディスクール)

言表が集積し 一つの事象について、総体を作り上げる

規定する

規定する

集積する

言表 (エノンセ)

言表 (エノンセ)

言表 (エノンセ)

具体的な発言行為

語られた状態

叙述された環境

言表 (エノンセ)

言表 (エノンセ)

言表 (エノンセ)

言表 (エノンセ)

同じ発言内容でも状況によって意味が異なってくる

時代

環境

社会関係

社会集団

前提

基準

ブラフマン
 宇宙の最高絶対原理

梵

一如
 (一緒である)

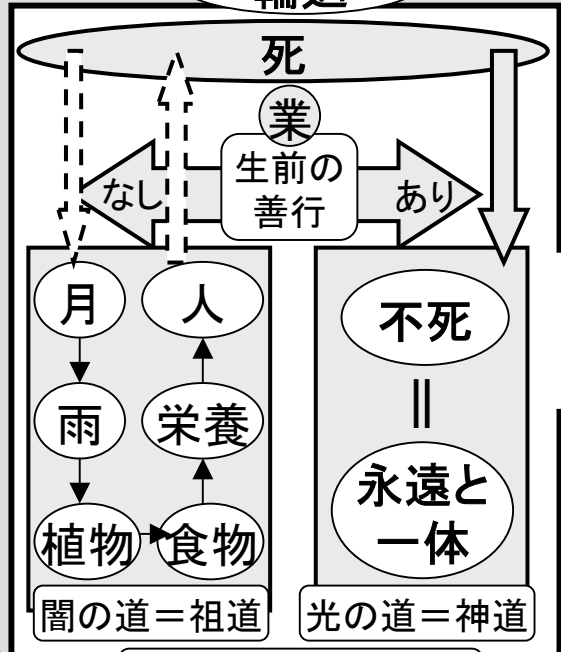
生命固有の究極原理
アートマン

我

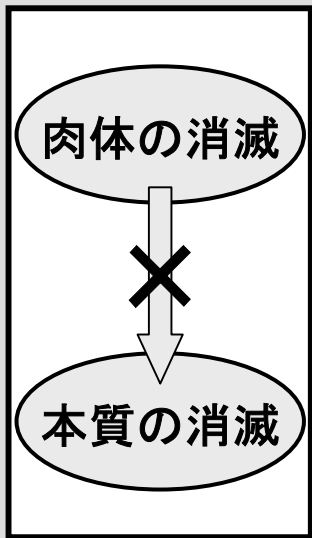
理解できる

理解すると

輪廻



宗教的な考え方



観念論	アートマンは認識主体である ⇒見るもの(目)があるから、 見ることができるもの(樹)を 理解できるという二元論では、 目を対象化できず、存在は意 識によるものである
实在論	万物の根源は「有」である ⇒「有る」=本質 塩(有)は、水に溶解となくな ってしまいが、本質の味は 水(塩水)に残る

哲学的な考え方

弟子の性格に応じた教育
 ↓
 孔子の死後、弟子間に
 教えの相違
 ↓
 教えの再編
 ↓
 『論語』の成立

小人
(つまらない人)

修養(努力と反省)を積む

君子
 (現実的な理想像)
 ・「聖人」を目指し修養(努力と反省)を積む

修養

理想像
聖人
 「仁」+「礼」
 +その他様々な資質
 ……
 人を責めるよりも自分を責める
 困っている人を救う

現実的な壁

「礼」
 身の丈にあった行動様式

- ・軽々しく発言しない
- ・問うことを恥じない
- ・etc.

「仁」
 人の道

- ・人を愛する・目上を敬う
- ・思いやり・誠実さ
- ・慎み深い
- ・忠恕(ちゅうじょ) = まごころ

「礼」
 「仁」

「仁」が第一
 余力があるなら「礼」

修養

道德(仁や礼など)による「徳治主義」

小国寡民のユートピア

老子(紀元前5世紀頃)

『道』

万物の根源

「徳」を体現している

無欲 謙虚 質朴

見えず、聞こえず、触れない

生まれる

「無為自然」

(あるがまま)

実践

暮らし

・現状に満足する

・水の流れるように
自然に生活する

・文明の利器を
欲しない

⋮

消極的
(普通にする)

こころ

・欲を捨てる

・自分に勝つ

・自分を知る

⋮

批判

道徳や仁義
がなくなった
からこそ礼が
改めて問われ
るのであり、
その時点で世
は乱れている

世を良くする方法

孔子
「礼」=
人為的制約

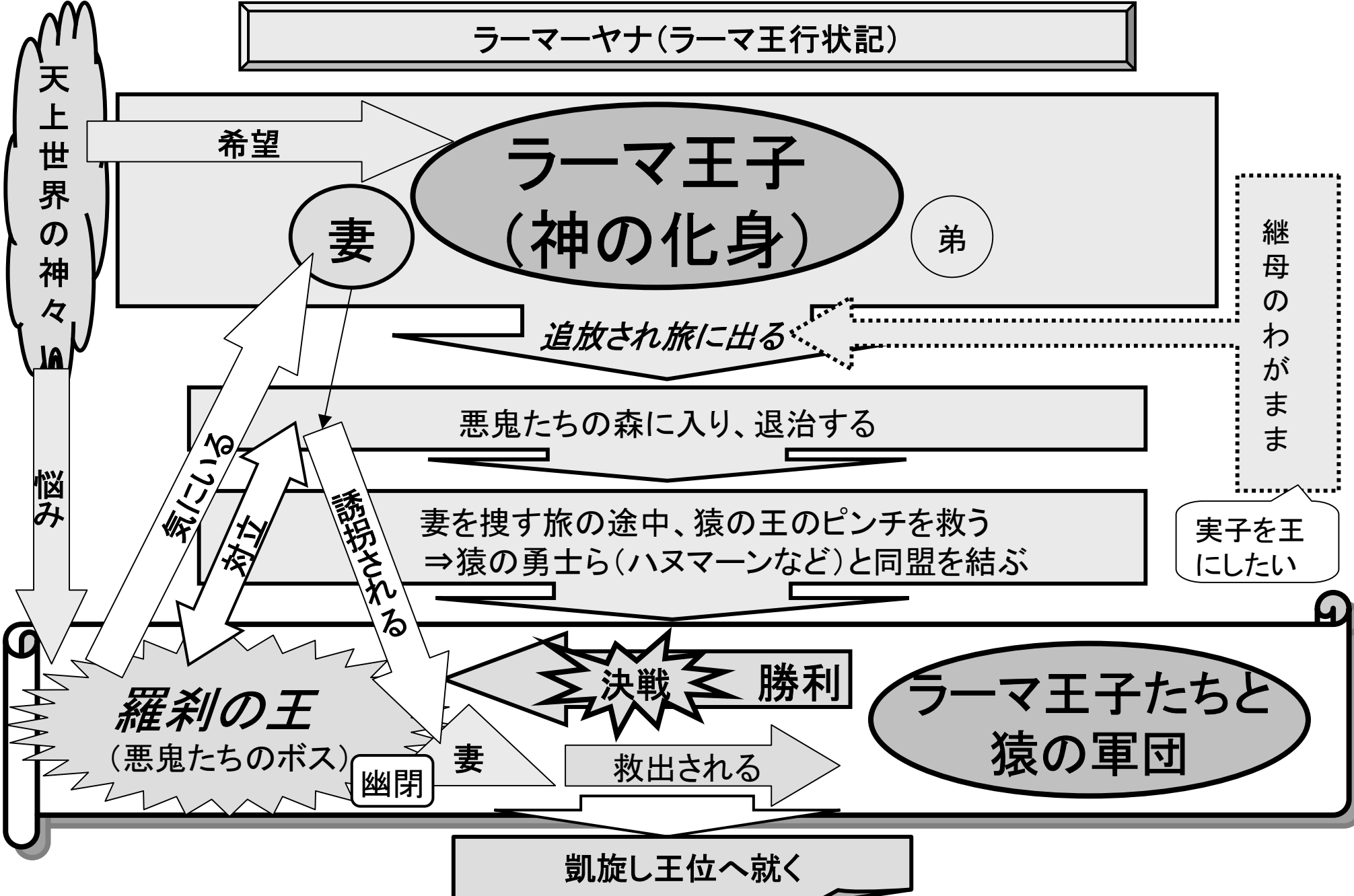
積極的

禁令が増えるほど人民は貧しくなる
技術が進むほど社会は乱れる
人間の知恵が増すほど不幸な事件が増える
法令が整うほど犯罪が増える

反文明
主義を
提唱

文明に汚染されていない
原初の生活に戻ることが
必要

ラーマヤナ(ラーマ王行状記)



天上世界の神々

希望

妻

ラーマ王子
(神の化身)

弟

継母のわがまま

追放され旅に出る

悪鬼たちの森に入り、退治する

妻を捜す旅の途中、猿の王のピンチを救う
=>猿の勇士ら(ハヌマーンなど)と同盟を結ぶ

実子を王にしたい

悩み

気になる
対立

誘拐される

羅刹の王

(悪鬼たちのボス)

決戦

勝利

ラーマ王子たちと
猿の軍団

幽閉

妻

救出される

凱旋し王位へ就く

Ⅰ 情報

「用間」

- ・情報は大切であり、収集に金を惜しむな

「地形」

- ・状況が有利なときは、自己責任で意思決定せよ

Ⅲ 必勝

「軍形」

- ・勝つべき戦は必勝ゆえ目立たないものだ

「九変」

- ・攻撃の原則論
- ・敵を追い詰めすぎな

Ⅱ 状況・心理

「火攻」

- ・感情で行動するな
- ・火攻めは適切な条件で初めて決行せよ

「九地」

- ・機先を制し、時には深く踏み入って戦え
- ・状況に応じた内部指導をせよ

「行軍」

- ・敵情をよく探索し部下は少数精鋭で
- ・油断を戒め、部下の罰には気をつかう
- ・温情と威厳を使い分ける

情報を集め、状況や人間の心理を分析し、必ず勝つ戦いを目指さなければならない

彼を知り己を知れば百戦殆うからず

実戦では臨機応変に戦え

Ⅳ 実戦

「謀攻」

- ・戦わずに勝つのがベスト
- ・君主は将に余計な口出しをしない

「軍争」

- ・急がば回れ
- ・禍を転じて福となす

「作戦」

- ・短期決戦せよ
- ・目的は勝利であり、戦うことではない

Ⅴ 臨機応変な戦い方

「虚実」

- ・水のように柔軟に変化し味方は集中、敵は分散させ、主導権をとれ

「兵勢」

- ・基本を心得た上で、それを自在に使い分ける
- ・指揮系統を明確に組織プレー重視

「始計」

- ・事前の見通しはつけるが、運用は流動的に

韓非子(紀元前280年頃? ~紀元前233年)

孔子の「仁」「礼」による
道徳の『徳治政治』

混乱する社会の現実

性悪説
個人は利己的である

批判

- ・現実的には徳では治めきれない
- ・過去を過大評価し固執する儒家は古く非合理的

法治主義

術

法を運用して臣下を使いこなすノウハウ

「形名参同」

申告と実績の一致を求める勤務評定形態

申告: 部下「10の事をします」

実績が

9=罰

仕事できていないから当然

10=賞

申告と実績が一致しているので褒賞を与える

11=罰

始めから過少申告していた可能性がある

明文化し人民に従うべき基準を示す

罰

重くすべき
(重いほど人は罪を犯さない)

賞

公正無私に適用

君主

利害関係
(ギブアンドテイク)

臣下

やる気

術によって、部下に睨みを効かせる

理解する

聖人を期待するのではなく、法律を用いる

普通の王による政治が可能

「史記」
 伝説上の黄帝から
 漢の武帝にいたる中国史

本紀

年代記

王朝や君主の
 事績や継承の過程を
 編年形式に記す

列伝

個人の伝記

その叙述を通して
 政治・社会・経済・文化などの
 趨勢をも描写

紀伝体の誕生
 中国独自の複合的歴史叙述形式

表

歴史の年表

天下の形勢のみではなく、
 古代の国ごとに異なる年表を
 一覧化するなど

書

制度史・文化史

特定の事柄を
 理論的・歴史的に記述

世家

年代記

国別の封建諸侯の
 編年形式年代記

起源が別の
 歴史叙述を
 複合して
 史書を著述

「史記」以前の中国や
 西洋の歴史叙述

・王や臣下の言
 (例: 古代帝王や賢臣の
 言葉を記した「尚書」)

・国別の史書
 (例: 春秋時代の八国の事
 績を国別に記した「国語」)

・年代記
 (例: 魯国の事件をまとめた
 年代記の「春秋」)

・賢人の思想や理論書
 (例: 戦国時代に諸国を遊説
 した策士の言葉の「戦国策」)

.....

個々を区別し同列視せず、個別の史書として取り扱う

マハーバーラタ(=バラタ国の戦いの大叙事詩)



五王子 (実は神々の子孫)

百王子

追放される

諸国をさまよい、
近国の王女を共通の妻にする

ばくち好きの長男がはめられる

逆襲

文武
卓越

陰謀

陰謀

対立

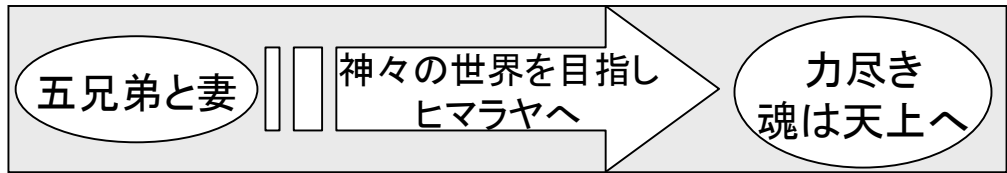


劣等感

聖地クルクシェートラ(=クル族の地 ※現在のデリー近郊)で
王位継承をめぐる18日間の大戦争

五王子勝利

その後



多数の挿話が聖典化して教えを説く

(例) 五王子三男が同族の戦いに疑問を持つ
 ⇒神が戦車の御者に化けて、正義のために戦うことが本来で、同族とは戦えないといったらわれは無意味と説く
 ⇒三男は納得できなかったが、不滅全能の神に信心することで、恩恵を与えてもらい解脱できるとの教えでようやく納得[バガバッド・ギーターより]

貞観政要
598年～649年

貞観政要

帝王学の教科書に

影響の一例

中国 ・唐～清まで(618～1911)の各皇帝

- ・一条天皇(在位986～1011)を始めとする歴代の天皇
- ・江戸時代の藩校
- ・教育勅語(1890～1945)
- ・現代でも幹部職の必読書

過去
現代

異なる体制にも不滅な通用性

伝説的要素

儒教

(国の中心思想)

現代的に

唐の二代目皇帝「太宗」が
臣下と交わした問答集

理念的

実践的 儒学政治

内容

君主

親族

ひいき
しない

功勞のない
皇族

格下げする

- ・常に緊張感を持って政治に取り組む
- ・一方のみを信じず多くの意見に耳を傾ける
- ・自己満足で褒美や刑罰を与えない
- ・発言は慎重にする
- ・態度は謙虚に
- ・個人の楽しみにおぼれない

部下の意見を聞く

人材登用

容易に責めない

公平に扱う

意見しやすい
環境をつくる

不十分でも採用
できる面を探す

欠点も正直に言う

失敗を恐れない

誠心誠意を尽くす

かつての敵でも
優秀な者は採用

地方にこそ
良い人材を配置

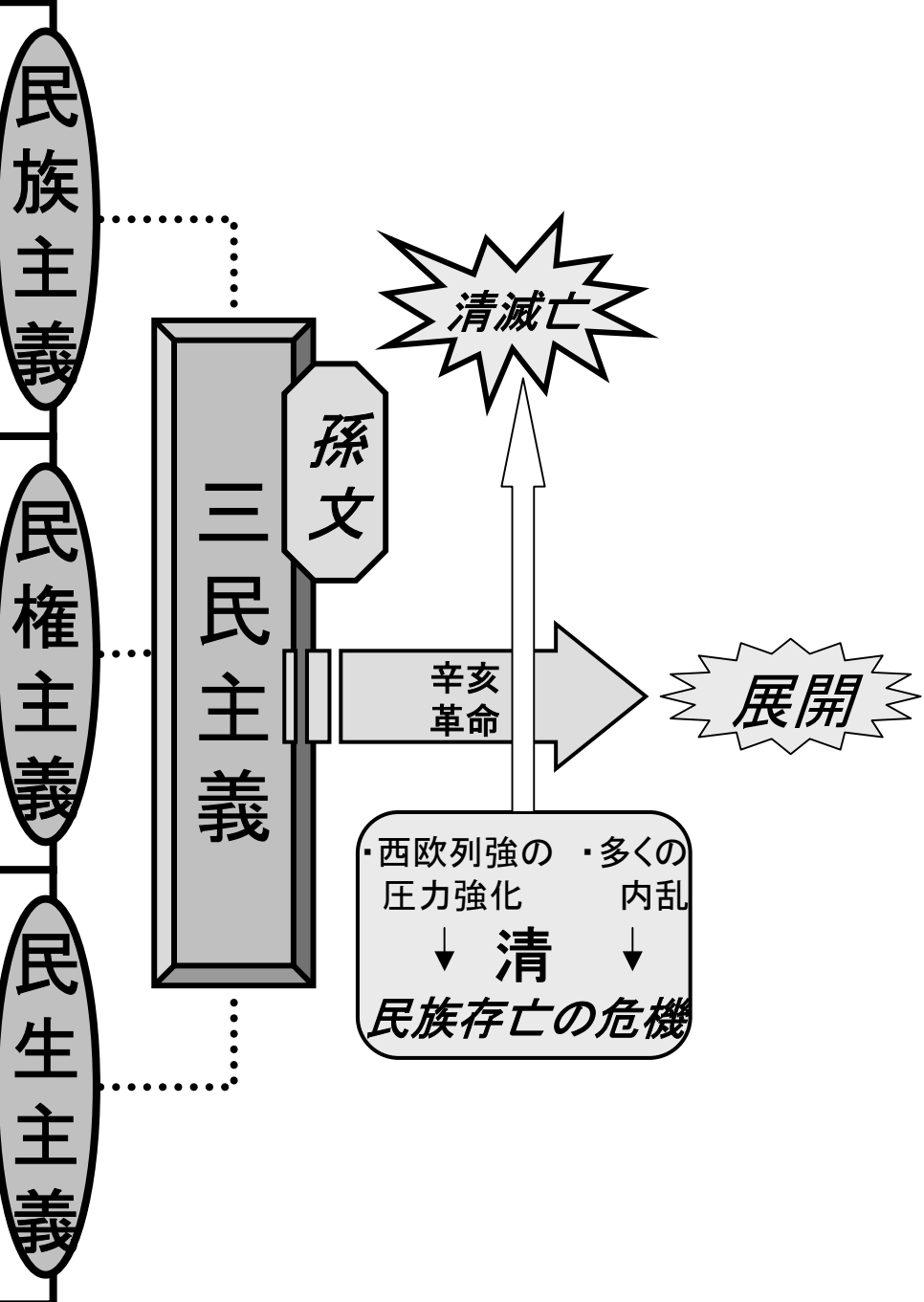
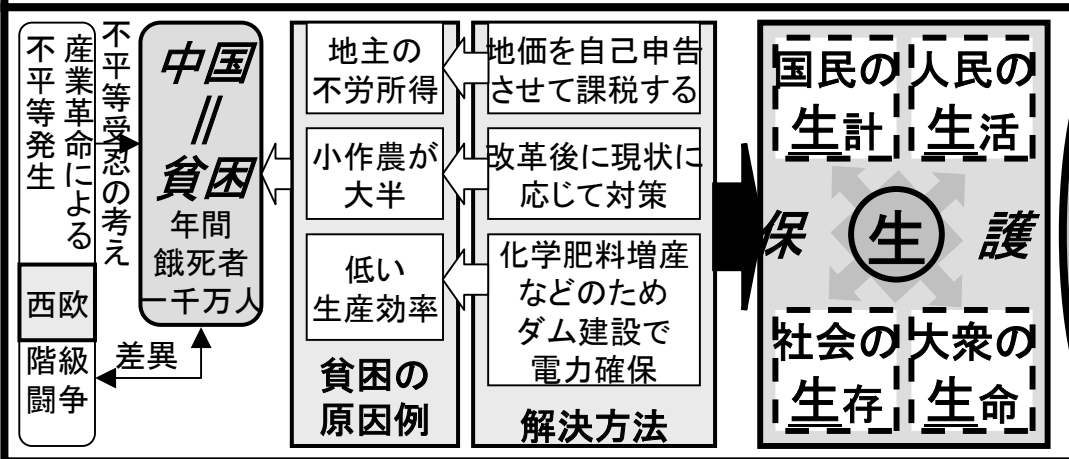
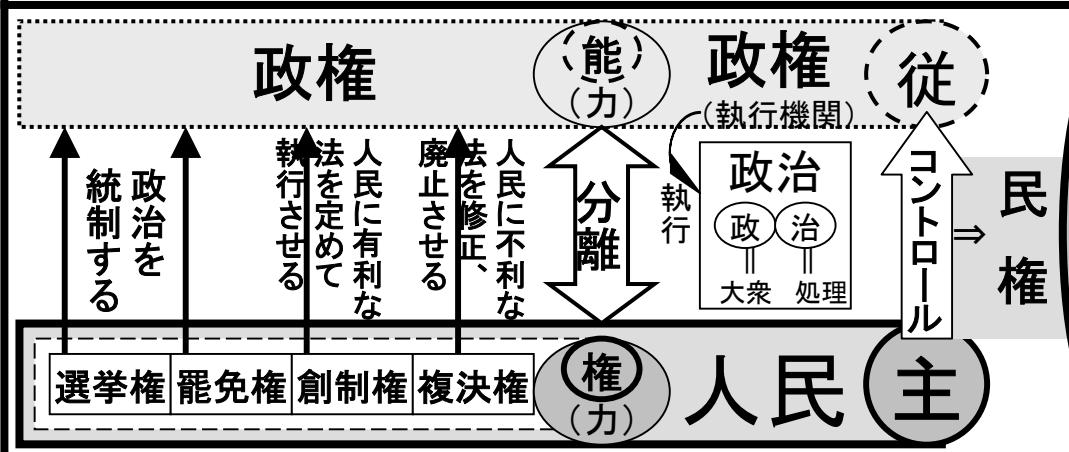
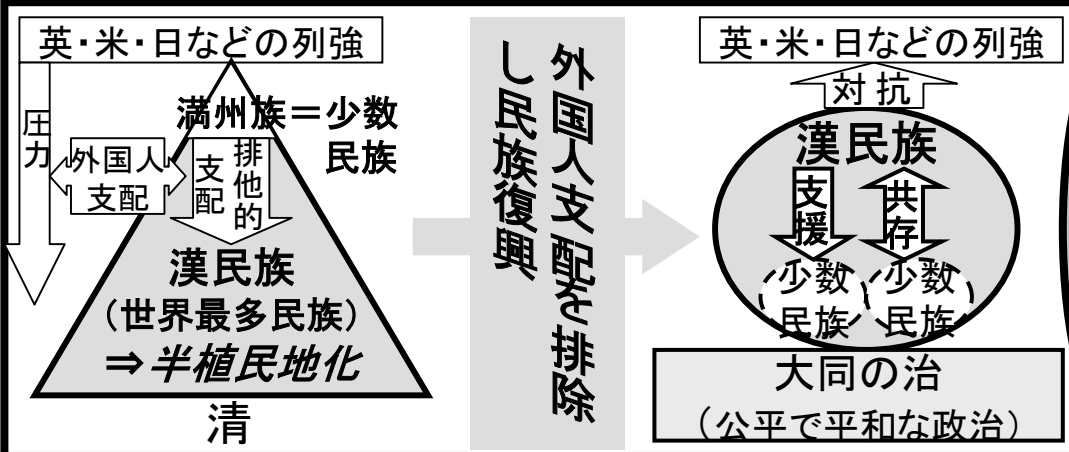
優れた人材は
いつの時代にもいる

仁義による政治で
人民を帰服させる
人民の力は大きく
恐れるべき

圧政をしない
(離反のもと)

臣 下

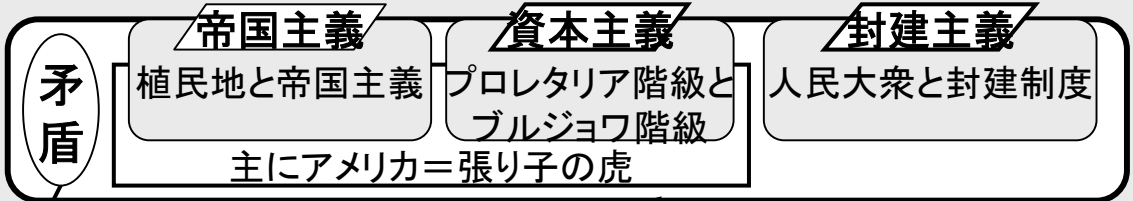
人民



「毛沢東語録」
(毛沢東
1893年～1976年)

敵

一部「博物館入り」 過去の産物「博物館入り」



矛盾

革命は不可欠

共産主義革命後

・戦いは希望しないが必要な現状
社会主義は愛国主義と国際主義の統一実現形態

戦いのない
平和な社会

物事の本質を発見すれば矛盾は解決

発見できないのは現状と歴史の調査不足

矛盾

主要

従属 副次的

国内の矛盾

- ・中国は社会主義大国だが貧乏⇒数十年の刻苦奮闘の歳月は必要
- ・社会主義国家内の労働者と農民の問題⇒農業の集団化と機械化で解決

共産主義
最も革命的な
進歩した制度

解決

人民の協力が不可欠

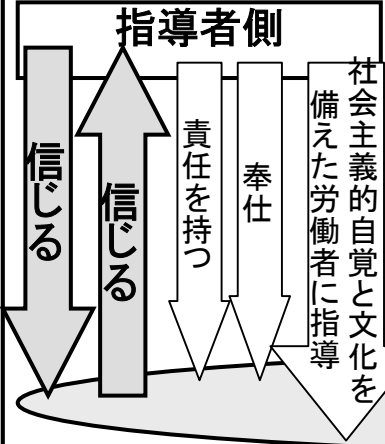
考え方・思想=全党の中心の環

階級闘争 生産闘争 科学実験

三つの実践が生む

謙虚でおごらない

進歩を生む



- ・自己満足しない
- ・困難や大きな努力は必ず生じる⇒幻想を抱くな
- ・幹部は兵士に配慮し、また学べ
- ・兵士同士援助しあう
- ・失敗から学ぶ
- ・長所短所は共に存在⇒客観的に把握する
- ・支持率などは常に調査し把握
- ・会議は簡潔に

国家
団結
人民 国内の諸民族

団結⇒批判⇒団結
(=解決)

男女均衡
賃金労働

真の英雄
人民

節約勤儉

中国